
THE LAST MEMORY ～第0使徒風斬レン～

風斬 滯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE LAST MEMORY 第0使徒風斬レン

【Nコード】

N1570Z

【作者名】

風斬 滯

【あらすじ】

エクソシスト風斬レンは、ノアメモリーが覚醒したため教団を去る

彼女の運命は如何に！？

第0夜く別れく

―あの惨劇から約5年―

ドガアンツ！！

何かが壊れる音とともにゴーレムから室長、コムイ・リーから通達が入る

《通達！通達！ホームの壁が何者かに破壊された模様！》

《ただちに確認へ向かえ！》

「メンドくせ」

そうつぶやいたのは、イノセンス、六幻、をもつエクソシスト神田ユウだ

面倒だ、と言いながらも指令なのでとりあえず音がした部屋へ

向かう

向かった部屋に住んでいるのは、エクソシスト風斬レンだ

神田が着いたときには、時既に遅し、住人風斬レンの姿も、彼女のイノセンス‘夜叉’も無くなっていた

神田はゴーレムの向こうにいるコムイへ言った

「おい、コムイ」

《神田くん？》

「壁を壊したヤツがわかった」

《それは誰だい？》

「多分、レンだろうイノセンスも無くなってる　俺はアイツを追う」

《無茶だよ、神田くん　それにどうして彼女が逃げたってわかるのさ》

「机の上にメモがあったへげんきでね」ってな、おまけにへさよなら」そう書いてある」

《…そういうことか、＜室長！レンがどこにいるかわかりました！＞どこだい！？＜崖を降りたトコの森です！＞》

《神田くん！レンちゃんを追って！》

「了解、門を開けろコムイ」

《急いで！神田くん》

「壁、壊してきちゃったけど門から出た方が良かったかな」

ハア、と溜息をつく藍色の髪の少女、彼女の足にはさっきまで傷があったのだろうか血痕がある

「急がないと、教団の追手がくる」

「オイ」

ふいに背後から聞き覚えのある声に呼び止められた少女は、振り向いて絶句する

「…………げっ！ユウ！？」

彼女を呼び止めたのは神田ユウだ

「レン、お前こんなトコでなにしてる？」

彼女、——レンは、動揺していたがとりあえず一言

「…ユウに話す必要があるの？」

レンがそういうと神田は自身のイノセンス‘六幻’の切っ先をレンの首にあてた、そして

「なにがあった？」

と、問うだが、レンは目を伏せ話そうとはしなかった　しばらくたってレンが口を開く

「……………いえない…言えないよ…」

まるで今にも消えてしまいそうなほどか細く、小さな声で言った
よく見ると彼女の頬には涙がつたっている

神田は何かを察したのだろうか、六幻を鞘へおさめた　そして、
神田はレンを抱き寄せた

「!?!?…ユウ？」

「…お前が何をしようと俺の知ったことじゃねえ…だから、話さなくていい」

そう言って神田はレンのことを少し強く抱きしめた

「ユウ…ありがとう」

レンはそういうと、普段見せている笑顔で神田に笑いかけた、まるでもう大丈夫だよ、そう言わんばかりの笑顔で

「ああ」

神田は短くそう返すとレンを離す

「それで？レンお前これからどうするつもりだ？」

「えっと…どうしよう、一日早く出てきたから、何にも考えてない…」

「ハア？一日早くでてきた？どうしてだ」

「私は、もう教団に戻ることはないだろうからじゃないかな」

『教団に戻ることはない』そう言ったレンの表情には、寂しさと悲しみが混ざっていた

「なあ、レン」

「何？」

「お前明日まで、一人でココにいるつもりか」

「まあ、明日まで向かえは来ない…かな」

「明日まで、明日までお前のそばにいてやる」

「ハイ？今なんと？」

なぜか、そう言い返すレンの目は点になっている

なぜなら、普段の神田が『そばにいてやる』なんて言葉いうハズがないからだ

「いやいやいやユウ！アンタ本部に戻れ！」

「なんでだ？」

「なんでもなにも アンタエクソシストでしょーが！」

心なしか先程のレンと比べると語気が荒くなった気がしないでもない
こんなやり取りがしばらく続き

「とりあえず、落ち着けレン」

神田のその一言でレンはとりあえず落ち着く、そして、核心に迫る

「なんで？わたしは、裏切り者だよ？」

「裏切り者だか、知ったことかよ お前はお前だろ？」

「！…そうだね」

少しの間レンは黙る そして、空を見上げると『もう、夜か』そ
うつぶやくと野原に寝転がる

すると、レンは突然感嘆の声をもらす

「きれい…」

「レン？どうした」

神田は、レンが寝転んでいるのをみると 同じ様に寝転がった

「すげえな」

レンと神田が見たのは、夜空一面に広がる星 一つ一つ色こそ違
うが夜空に良くはえてとても美しい

「ユウ？」

「なんだよ」

「ありがとう 大好きだよ、ユウ」

「ああ」

「おやすみ…」

「それじゃ、ユウ元気でね リナちゃんにもよろしく言っ
いて」

「待て」

歩き出したレンをいきなり呼び止め 何かを投げた

「それ、持っとけ」

あと、———」

神田はレンに耳打ちすると

「わかったな？」

「———うん、わかった

で、これって“約束”？」

「ああ」

この日を境にレンを見たものはいない

とある一族を除いては――……

第0夜く別れく（後書き）

駄文ですがどうぞよろしく

風斬 レンに質問！

質問ルームにて

「それでは早速質問を始めたいと思いますーす」

「何する気よ？ 駄文作者」

「質問だよ、質問！ では第一問！」

「いきなりだな…」

「身長・体重は？」

「162?・35?」

「好きなものは？」

「サラダとか野菜類だよ」

「嫌いなものは？」

「肉系 でも人なら、コムイ、千年公」

「イノセンスは？」

「夜叉という槍型のものだ」

「イノセンスの能力は？」

「秘密だよ、でもほっときゃ出てくるんじゃない」

「メモリーの名前は？」

「知らないね」

「誕生日は？」

「7月10日」

「血液型は？」

「O型」

「年は？」

「現在13じゃね？」

「では、最後に風斬レンさん！皆さんに挨拶お願いします！」

「えーっと、これからしばらくの間、よろしく」

「では」

「「じゃあな」」

風斬 レンに質問！（後書き）

そろそろレンのキャラを固めていききたいと思います

第1夜〜目覚め〜

side レン

目を開けた時、見たのは真っ白い天井、名前以外何も分からない
生きる理由も、なんでここにいるのかも、何もかも

「ようやく、目覚めたな風斬レン」

「！誰だよ、アンタ…」

私が問うたのは、褐色の肌に額に良く分からない模様をつけた男

「まあ、そういうのはトーゼンだよな オレの名前は

ティキ・

ミックだ」

「あゝレン起きてるゝティツキーなんでボクに教えてくれないの
さゝ！」

「教えたぞ、ロードお前が聞いて無かっただけじゃないのか？」

「ティツキーのイケズウゝ」

「おやおや、ようやく目覚めたようデスネ？風斬レン？」

なんだ？こいつは？服は貴族とピエロを混ぜたような格好、達磨

のような体型

感想すら浮かばない

「「ジャスデビ登場！」」

「今度は、何なんだよ どういつもこいつも…」

あれ？空気が止まった？私なんか言ったかな…今突然入ってきた二人組もフリーズしてる

「ヒヒッ、こいつ結構口悪いね」

二人組の金髪の方がそう言った

なるほど、さっき空気を止めたのは私か…うん？なんか異和感があるな

よく見てみると、さっきのティキとかいう奴とかロードって子に残念な二人組…

あと私、全員もしかして、いや、もしかしくても肌の色一緒？

私の肌ってこんなに浅黒かったけなあ…

「ま、仲良くしようよおーレンーボクはロードだよおー」

「なんで、私の名前知ってんの？」

「秘密ー」

「デロは、ジャスデロ」

「オレはデビットだ」

「二人合わせてジャスデビだよ ヒヒッ」

「ああさっきの二人組か」

「二人組じゃねえ！ジャスデビだ！」

確か、デビットだっけ？ジャスデロとかいう奴より五月蠅いな
…黙らせてやろうか

ま、いっか メンドくさいし

ゴトッ

私は、落ちたものをデビットに渡そうとした、その時そよ風が吹
き それに書いてある

文字、それは

“請求書”

「オイ、何か落ちたぞってコレ…請求書？えっと、ナニナニ蛙の
ひずめ亭 13ギニー、

鳥のはらわた亭 45ギニー、e t s 占めて 86ギニー……
うわー何これ」

「ジャスデビたま、また借金つけられたレロ〜？」

かぼちゃがついた傘が、なぜかしやべる　するとジャスデロが口を開く

「穴あき傘にされたくないなら黙ってろ　ヒヒッ」

なんなんだろ、こいつらの勢力図…

「茶番が続きまシタガ、本題に入りまシヨウ？風斬レン？」

お前は、我輩の仲間になるつもりはアリマスか？？」

「∴好きにしろ、どうせ私に選択権は無い様だからね　でも、」

「でも？なんでシヨウ？？」

「記憶が戻ったら、私はアンタらをどうするか　分からないよ？」

そういつて　微笑む彼女はまるで悪魔のようだった

「戻ったら”ご自由ニ？　　∴戻るハズナイデスケドネ？」

千年公が最後に言った言葉は、レンには聞こえていないようだった

「どうせあなたはノアになったのデスカラ？我輩の仲間になるホカナイノデスヨ？∴風斬レン？」

「ノアとやらが何かはともかく、協力してあげるよ…千年公」

今の‘ノア’としての彼女には、
‘エクソシスト’だった頃の面
影すら残ってはいなかった…

第1夜〜目覚め〜（後書き）

レンがノアになりなしたねー

いや〜無計画にもほどがある

第2夜〜亡霊〜

風斬レン 16歳

「マテール？」

「ハイ？先程、ブローカー、から情報がありマシテネ？」

「何の情報？千年公、もしかしてイノセンス？」

そう問いたのは、藍色の髪のア、レンだ

レンの質問に答えるのは、少し、いやかなり太っている千年伯爵だ

「その通りデスヨ？レン？ 取りに行つてモラエマスカ？？」

「トーゼン！…で、マテールってどうやって行くの？」

「ゲートを出しマスカラ、少し待っててください？ おゝいティキぽゝん？」

「おい、千年公その呼び方やめてくれよ で、ご用は？」

そう言つて闇から顔を出したのは、ティキだ

そして千年公はティキに何か耳打ちした するとティキがレンを呼ぶ

「レン、ちょっと来いよ」

「あいさー」

ティキに連れられレンが来たのは、膨大な武器が保管されている部屋だ

部屋を見回すと、銃に剣、弓など様々な武器がある

「確か、コレだっけな」

ティキは、全長140?は軽くあるだろう桐箱をもってきた
すぐさまレンは、ティキに問う

「ティキ、何これ？」

「開ければわかる」

そして、レンは桐箱を開け、その青い瞳には困惑の色が宿る

「おい、ティキ、なんでイノセンスがココにある？」

レンが開いた桐箱の中身は、レンが、エクソシストだった頃の武器だった

だが、今の彼女はそれを知らない、いや知るハズがない

重くなった空気を何とかしようとティキはとりあえず口を開いた

「これは、お前がノアになる前に使っていた武器だ 名前は知らんが」

ノアになる前なんてないだろ、そう言わんばかりの疑いの目

「いいから持っとけて」

そう、強引にレンにイノセンスを渡すと

「さ、あんま千年公を待たしてやんなよ」

「…了解」

「千年公、終わったぞ」

「遅いデスヨ？もうゲートは開いてマス？レン、準備はいいデスカ？？」

さっきの暗い顔は、ドコへやら楽しそうな表情のレンがいた

「あいさ、準備完了だぜ、千年公♪」

「では、行ってきてクダサイ？マテールへ？」

「行ってきましたーす」

ゲートの光の中に彼女の姿は見えなくなった

同時刻

マテールへはアレン・ウォーカー、
神田ユウの2名のエクソシストが
向かっていた

第2夜〜亡霊〜（後書き）

そろそろ原作介入します！

土日は、UPできませんので、
あしからず

第3夜　マテール2

「INマテール！」

まるで、長い時間探していたかのような大声をあげるレンだが、彼女がココに着くまでの所有時間は約2分だ

「…さて、イノセンスはどこかな…？」

そういう彼女の笑みは狂気に満ちていた

同時刻南イタリア　マテールの地

「よし　結界に捕えたぞ…！」

「死んでも出すな…！！！」

約3体のアクマが結界装置で捕えられていた

「これで、しばらくは時間が稼げますね隊長」

「…どうかなこの数の結界装置で足りるかどうか」

息も絶え絶え隊長と呼ばれた者が、重い口を開く

「中央の奴の姿を見ろ…あれはだいぶ人間を殺してやがる」

ドン！

「！！」

隊長の隣のファインダーがアクマに頭を撃ち抜かれたのだ

（ヒヤヒヤ！ヒヤヒヤヒヤヒヤ！！）

（私はアクマ！！！！）

ボコボコボコと結界が膨張していく

それを見た隊長は、大声を張り上げる

「ヤバイ…退避しろ！ こいつ 進化するぞ！！！！」

するとその場に緊張感が走る

（私はアクマ）

（ダークマターから生まれた新たな自我！！）

（育んでくれて どうもありがとう…）

そして、結界が破られピエロのようなアクマが顔を晒した

「レベルアップだー」

都市にファインダー部隊の絶望の声が響いた

「ねえ、千年公イノセンスってどんな形してんの？」

《そうデスネエ？デハこんな話をしまショウ？》

千年公がした話はこんなものだった

‘古代都市マテール’には、亡霊が出るという

亡霊の正体は、かつてのマテールの住人

町を捨て移住していった仲間達を怨み

その顔は恐ろしく醜やか

孤独を癒すため 町に近づいた子供を引きずり込む

「つまり、何型だよ千年公」

まるで、わかりずれエ、そう言わんばかりの表情だ

《おそラク、人型でショウ？》

ちっ、とレンは舌打ちすると無線を切った

『ファインダーあたりに聞くとするか…』

そして、先程絶叫が聞こえたところへ向かう

「…！」

鼻につく異臭、あたりにあるのは、赤

おそらく全てファインダーのものだろう

体が残っている者がいないわけではない、

残っている者もほとんどが原型を留めていなかったのだ

すると、他の場所からミサイルの轟音が響いてくる

「おっ？イノセンス見つかったのかな？」

ニヤッと笑うと音がしている場所にレンは突っ込んでいった

「どんどん撃ってー」

先程、レベル2となったアクマが指揮をとっているようだ

2のしたから ううつと人間のうめき声がする

「この 人間め」

ぐに、2はファインダーの頭を踏んでいた

「装置ごと人形を結界に閉じ込めるなんて考えたね

こりゃ時間かかりそうだ」

すると死にかけのファインダーは2に向かって息も絶え絶え言った

「イ、イ、ノゼンズはお前らアクマになんか渡さない…っ」

2はファインダーの頭をぐつと踏む

「ギャアア」

ブシュ、ファインダーの頭から血が吹き出る

「ヒマ潰しにお前の頭で遊んでやる」

「やめろ！」

白髪のエクソシストが無謀にも2に突っ込んでいった

結界のなかの人形も驚いているようだ

そのとき不意に声がした

「イノセンス発見!…エクソシスト?」

ラッキー、と呟くと

「おい、2そいつ私に譲ってくれない? 楽しそうだからさ♪」

「っ…ノア様、わかりました…」

「お前はイノセンス追えよ? 追わなかったらお前

消すよ?」

冷たい冷酷な声でレベル2に言い放つと

白髪のエクソシストに向きなおした

そして、レンは楽しそうに笑うと白髪のエクソシストに告げた

「つぎの相手は私だよ♪白髪のエクソシストくん」

第3夜くマテール2く（後書き）

次回はVSアレン君です

相変わらずの駄文お許しください

第4夜〜マテール3〜

「次の相手は私だよ♪白髪のエクソシストくん」

にっこりと笑顔のレン、だが、アレンの顔つきは厳しい

（なんで、彼女を見てアクマは脅えた？）

アレンの疑問は当然のものだ、

レンがアクマよりレベルの高い存在ということ

ましてや、ノアと言う存在がいる、その事実すら知らないのだから…

そして、レンは笑顔のままアレンに聞いた

「私の名は、風斬レンだよ　あんたの名は？」

疑問を持ちながらもアレンは問いに答える

「僕の名前はアレン・ウォーカーです」

「そっかー覚えとくよ、アレン・ウォーカーでも私と戦って死ななかったら、ね」

レンは“エクソシスト”だった頃のイノセンス

‘夜叉’を取り出す　そして――――

「イノセンス発動——夜叉」

レンがイノセンスを発動させたことにより、

アレン・ウォーカーの疑問はまた増える

（この人、適合者！？あんなイノセンス教団で見たことがない！）

「なあ、アレン・ウォーカーよそ見してると

死んじゃうよ？」

気付いたら目の前まで来ているレン

「バイバイ————夜叉一陣目炎斬」

「！はやつ——」

ドガァン！

「なーんだ、弱いんだね、エクソシストって」

ハァ、と退屈そうな溜息を一つ

「僕は、まだ死んでませんよ？レンさん」

肩で息をしているが、傷一つアレンにはない

（危なかった…僕のイノセンスが発動していなかったら

僕はきつと死んでいた…！）

確かにレンのスピードは恐るべき速さだ

あの速さは常人にはない 当然アクマにも

「あんた、アレンだっけ？ 確か、アクマの魂が見える奴…

私ら、あんたの情報少し持ってるんだ

ま、千年公に聞いた程度のものだけど」

「そういう貴女はどうなんですか？ レンさんあの速さといい、

そのイノセンスといい

貴女のほうこそ何かあるんじゃないんですか」

追及的なアレンにレンは一言だけ言った

「私は、千年公の仲間っていうか味方、ってどこかな？

これ以上は教えられないよ…ありゃ？ 地震？」

先程からグラグラしていたのだが、

両者共に気付かなかった様だ

「こりゃ、やばいかも…」

「うそでしょ…」

ビキビキビキ……ゴシヤツ！

「「ぎゃー！」「

二人の声は地下へと消えていった…

第4夜くマテール3く（後書き）

しまった…

神田の存在を忘れていた…

どーしよ

第5夜　マテール4

「ぎゃー！ー！！」

ドシャツ！

静けさをたたえていたマテールの地下道

だが、レンとアレンが落下したことにより、

静けさは一瞬にして、消えうせる

すると、突然ガラガラとガレキが浮き上がった

「痛っっ」

先に起き上ったのはレンのようだ

片手にガレキを持っているのでかなり不自然だ

そして、もうひとつ不自然な所がある　それは

落ちてきたときの傷がひとつ残らず回復していること

だが、レンにとっては何もかもがどうでも良いのだ

―――――記憶を取り戻せれば、それで…

ふいに、レンの隣の巨石がこれまた巨大な手が持ち上げる

「…っ…ここは？」

どうやら、アレンは生きていたようだ

体中が痛むのだろう、立ち上がるのもままならないようだ

「立てるか？アレン？」

挑発的にレンが言うと、自力で立ち上がる

「馬鹿にしないでください、レンさん」

「ああ〜ワリィ、ちょっとした癖でさ」

ハハッとレンが楽しそうに笑う、

つられてアレンも笑いそうになるだが、

アレンは、レンが自らの、そして教団の敵であることを

思い出し、そして険しい顔つきになる

レンが表情の変化に気づかないハズがない

一度間合いを取ると

「かかってこいよ、アレン・ウォーカー！」

(長引かせては面倒だね…、ちゃっちゃと済ますか…)

と、レンは夜叉を構えた

「では、行きますよっ!」

アレンはレンに無謀にも突っ込んでいった

ガギン!

ギイン!

ズガアン!!!

激しい戦いの中、レンは余裕の笑みを浮かべている

だが、対するアレンの表情は苦しそうだ

そんな中、アレンはギリギリで攻撃をかわしながら

レンに聞いた

「レンさん!」

「?」

「あなたはッッ!」

ギイン!

レンは、アレンの首筋に、槍の先端を突き付けた

「何さ？私に聞きたいことでも？」

「ええ、僕には不自然に映るんですよ…」

なんで、アクマと人間が一緒に行動するんですか？」

「なにかと思えばそんなことかよ、答えは単純だ

アクマは私たちの兵器だから、それが答えよ」

「兵器だって！？何言って…」

レンは突き付けた夜叉を強く押し、アレンに告げた

「兵器は人が人を殺すものだ お前のイノセンスも兵器でしょ？」

そう告げたレンの声は、驚くほどに冷徹で殺意がこもっていた

レンが続ける、

「それに、——私には千年公が何しようが関係ない

私の目的に関係があること以外にはね」

「あなたの目的とはなんです？」

冷静にアレンはレンに聞き返していた

「2つの“約束”を守ること、そして

———記憶を取り戻すこと……

それだけが目的だよ」

「記憶を取り戻す？　どういう……」

「悪いが少し眠っててもらおうよ、アレン・ウォーカー……」

にこっと笑うとレンの笑顔は豹変する　ノアの残忍な笑みだ

（いいかげんイノセンスを探さないと、千年公に叱られる）

同時刻　マテールの地下通路

レベル2はアレン・ウォーカーのゴーレム

ティムキャンピーを追っていた

ドドドドドド……

どうやら、レンにイノセンスを追え、と

言われてからずっと追いかけているようだ

ギュッ

2がタイムのしっぽを右手でつかむとぷら〜んとぶら下げる

「へへへへ！お前も殺す！！えいや！」

ぐしゃっ、2はタイムをチョップで破壊すると

「ヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

愉しそうに笑うのだった

その声がマテールの地下通路まで聞こえているとも知らずに

突然2の脳内に自分より格上のノア、レンの声が響く

（おい、お前イノセンスを追わなかったら、‘消す’と

言ったよね？

さっさと追えよ…役立たずが…）

レンの言葉が終っても2はしばらく硬直していた

だが、レンの‘消す’その言葉に威圧されたわけではない

2はレンの存在自体に恐怖しているのだ

レンが、ノアが言ったことは実行しないと消される

2の頭の中はそのことではいっぱいだった

だれでも、上の者は恐ろしいだろう？それと同じだ

（ノア様の命令は絶対！果たさなかったら私が消される！

せっかくここまで進化したのに消されるのはごめんだ）

と、思うとイノセンスを追うのに絶好の相手を見つける

（こいつなら、姿を写してもバレない…ヒヤヒヤヒヤ！）

第5夜くマテール4く（後書き）

全然進みませんねー

只今原作で2刊目です

第6夜〜マテール5〜

（こいつなら姿を写してもバレないヒヤヒヤヒヤ！）

レベル2が目を着けたのは、――――

数分後、マテール地下通路

「神田殿」

スツと闇から出てきたのはファインダーのトマ

神田はトマがきたことに気づく

そして少女と老人に向き直ると

「悪いがこちらでも引き下がれん あのアクマ達に

お前の心臓を奪われるワケにはいかないんだ

今はいいが最後には必ず心臓をもらう

巻き込んですまない」

「「……………」」

どうやら人形の心臓がイノセンスの様だ

トマが神田に粉々になったナニかを差し出す

「ティムキャンピーです」

するとティムは、トマの手の中で少しずつ元の姿に戻っていく

そして完全に自己修復すると、体の半分以上はあるであろう

巨大な口を開くと、レベル2の姿を映していく

これは、ティムの機能だ

神田はその映像を注意深く観察すると、あることに気づく

「鏡のようだ…」

「はい?」

神田は続ける

「逆さまなんだよこのアクマ…」

見てみる、奴がモヤシに化けた時の姿…服とか武器とか…

左右逆になってる」

トマはあることに疑問を持つ

「もやし?」

「あいつのことだ」

あいつとは、アレンのことだ

だが途中からレンが割り込んできたために

これ以上レベル2の情報を持っていない

コンコンコン

「おい、トマ」

「なんででしょうか？」

「今、何か聞こえたか？」

「どのような音ですか？」

「まるで、硬いものを叩いているような音だが

聞こえなかったのか？」

ドガァン！

「「！！？」」

神田とトマの隣の壁が碎け散った

「あー、やっと出れたー！

：エクソシストと、ファインダー？

ってことは、イノセンスも一緒かな？」

壁から出てきたのはレン、ずいぶん迷い続けていたようで

疲れ切った顔をしている

「さて、イノセンスを渡してもらおうか

エクソシストにファインダー？」

神田は険しい顔でレンに問う

「もやしはどうした？」

もやしが何なのかわからないのだろう

レンの目は点状態だ

「モヤシって誰？」

「お前が相手してた奴だ」

「ああ、アレン・ウォーカーのことか

あいつは今ごろどっかで迷ってるんじゃない？

私は気絶させたただだし、」

「気絶させただと？」

「そうだよ、私はあんたらの敵だし

そうするのが普通でしょ？」

私はあんたらの敵、

レンのその言葉に神田は一瞬動揺したが、

神田には神田の任務がある、

私情を持ち込む訳にもいかないのだ

「おい、お前」

「何よ？」

「お前の名は、風斬レンで間違いないな？」

「確かにそうだけど、なんで私の名前を？」

神田はレンにとって信じられない事実を口にする

「それは、お前が3年前まで

――エクソシストだったからだ」

「!?!?」

第6夜くマテール5く（後書き）

次回をご期待ください

アンケート！

この小説を読んでくれている

読者のみなさん！

これから、レンのイラストを掲載するか迷って

いるのですが掲載した方がいいでしょうか

掲載するなら皆さんにアンケートを取ろうと

思った次第です

次の質問にどうか、お答えください！

1、レンの容姿で想像したことは

なんですか？

（目の形や雰囲気など）

2、レンの衣装はどういった物がいいでしょうか

（着物、ブラウスなど）

3、クリスマスは、番外編を書くつもりですが

こういうものがいいいでしょうか

（ノアとのパーティ、エクソシストだった頃の
記憶など）

4、以後、挿絵をいれるべきでしょうか

以上の4つです、どうかお答えください！

アンケート！（後書き）

感想の所に、意見をお願いします！

第7夜〜マテール6〜

「私が、エクソシストだって?」

「マジかよ! 千年公!」

「エエ? そうデスヨ? レンは、元、エクソシストデス
そんなコトよりジャスデビ?」

クロス討伐のお仕事はドウシマシタ?」

「おう、直球!」

どうやら、仕事は失敗したようだ…

デビット（髪が黒い方）が、口を開く

「レンはそのことを知ってんのか?」

「知らないハズデス? 教えてませんカラ?」

「そういや、レンって記憶ねえんだよな…」

どーやって消したんだ千年公」

「彼女のノア的能力を使いまシタ？」

「レンの能力って何だよ」

「全てを無に帰す力デス？それをレンの脳に使って

記憶を消したのデス？」

「「！！」」

「レンの記憶って戻らないの？ヒッ！」

特徴的な喋り方、これはジャスデロだ

「戻りませんか？デスが、レンが能力の使い方を思い出せば

記憶を取り戻すかも知れませんか？」

デビットは隣にいるジャスデロに話しかける

「なあ、ジャスデロ」

「？デビット」

「ノアにはイノセンスは毒だよな？」

「うん、そーだよ ヒツ！」

珍しくデビットが考え込む

（おかしくねえか？イノセンスはオレらに毒だろ？

なのに、レンはイノセンスの適合者：

だめだ、意味わかんねえ！）

己が頭脳では理解不能だとわかったデビットは

千年公に聞いた方がいい、思い千年公に聞くことにした

「なあ、千年公」

「何でショウ？？」

「レンはノアだよな？」

「ハイ？まごうことナキノアデスヨ？」

「じゃあ、なんでレンがイノセンス

なんかの適合者なんだよ？」

「簡単なことデスヨ？、あの子は、14番目、と同じ

本来存在しないハズのノアだからデス？

イレギュラーにはナニがあるか、わからないでショウ?。」

そう、ノアは13名それ以上なんてありえないのだ

「ちなみに、あの子が方舟へココへにきたノハ

ある『取引』ヲしたからナノデス?」

「『取引』?」

首をかしげ、顔を見合わせるジャスデビ

「エエ?『取引』デス?あの子がここに来る代わりに

ある人物を元に戻す、とイウ条件で

あの子は、教団とお友達を裏切ってまでココに来たのデスヨ?

わかりマシタ??二人共??」

「ああ、大体…」

「ヒッ!ややこしいね!」

「タダ…消去したとイッテモ、彼女の能力を

使いマシタカラネエ…?もしかしたらチョットした事で

あの子の記憶が戻ってシマウカもしれマセン?

せめて、マテールにエクソシストが居ないとイイのデスガ？」

sideレン

嘘だ…私はノアだ、エクソシストじゃない

でも、この人が嘘を言ってるようには見えない…

3年前…か、記憶にないのに確かめようがないじゃないか

ティキや千年公が、私に嘘つくわけないよね…？

わからない…あの時と同じだ、私がノアになったときと、同じ…

「おい、どうして何も言わない？」

「…私になにが言えるのさ…わかんないから言えないね

いや、わからないじゃなくて、知らない’かな…」

「何が言いたい」

「知らない’ことはどうにもならない

3年前まで、って言ったよね？

悪いけどその時期の記憶は、私にはないんだよ…」

知らないって怖いな…せめてそのときの記憶が私に

残ってたらよかったのに…

「記憶がないだと?」

なんか今にも襲ってきそうだね

でもね、知らないモノは知らない

「ないものはない、ってことさ」

「どういうことだ」

この人自覚してるの? さっきから同じ事聞いてるよ…

「あのさー自覚してるかもしれないけど

さっきから似たような事聞いてるよ?」

「知るか」

「オイオイ、そんなのアリかよ…」

ジャスデビだったらキレてんな

ハア…

「メンドクセ…」

「それは私が言いたいんだけど…でさあイノセンスは？」

気づいたらいないよ…逃げられたなあ

「あいつら逃げやがった!!」

「気づくの遅くない？」

「ああ？」

なんつう殺気…怖いね

「テメエ気づいてたなら言えよ！」

「私の知ったことじゃないね！」

「お前…イノセンス追ってんじゃねエのかよ！」

「追ってるけどそれが何よ! あんたエクソシストでしょ!」

「カンケーねえ！」

「ざけんな! なんで私が！」

「闘んのかテメエ！」

「上等だ! かかってこいよ!」

「神田殿、落ち着いてください!」

「「んだよ、テメエ！」」

……？なんだ？こんなこと前にも……？

ザザッ

頭に何か流れてくる……なんだ……！？これは記憶……！

『ユウ、レン、いつまで続けてんのさ！』

『「なんだ、アルマか」』

『なんだ、ってなんだよ！二人共！』

『どうせ怪我しても治るよ？』

『そういうことじゃない！』

『そうだぜ、アルマこんなの10秒もすりゃ治る』

なんだよ、こりゃあ、こんな記憶知らないぜ？

アルマ、ユウ、レン？

誰だ？あれは私か？じゃああの二人は？

あの、片割れの方には見覚えが無くもないような……？

誰かに似てんだよなー誰だっけ…？

あの目つきの悪さは、まさか、まさか！

目の前の長髪のエクソシストか！？

いやいや、ありえねえ！つか、私はアイツと同郷かよ！

「ククッ…アハハハッ！」

「！？」

「あー、なるほどねえ…」

結局、私はエクソシストだった、ってわけか

笑えてくるね…どうりでイノセンスの使い方が

わかるわけだ

？ファインダーの様子がおかしい？固まってる？

「神田殿後ろ…」

アレン・ウォーカー？へえ…考えたねレベル2

（偉いじゃん2？よく思いついたね）

（これで、ファインダーは消えます）

（でも、しばらくふりを続けろよ？）

（わかりました、レン様）

ゆらり、アレンもどきが近づいてくる

「さ、左右逆…っ」

へえ、あいつ神田って言うんだ

記憶じゃ、ユウだっけなってこたあ 神田ユウか

神田のイノセンスの形状は日本刀？

おっかないね

神田はイノセンスをかまえた

「どうやら とんだ馬鹿のようだな」

馬鹿なのはあんたじゃないの？

ほら、よくみろよ

まあ見る気もないだろうけど

あのアレンがなんかおかしいとは、思わなかったのか？

短気っつーのは直した方がいいんじゃないの

ほら、どうこう言ってる間にもアレンもどき

今にも泣きそうじゃん

バン！

なんだ！？

壁から手が生えてる！？いや違う！

あの手はアレン・ウォーカーのイノセンスだ！

あーあ、折角ファインダー消せそうだったのに

何してんの、アレン君？

今にも死にそうな、アレンもどきが

小さくアレンの名を呼ぶ

「ウォ…ウォーカー殿…」

…ハア

とんだお人好しだねアレン・ウォーカー

神田が殺気の籠った声でアレンを呼ぶ

「モヤシー！！」

「神田…」

「どういふつもりだテメエ…！」

なんでアクマを庇いやがった…！！！」

アレンは一瞬怯んだが、臆することなく

言い返す、…茶番だね

「神田、僕にはアクマを見分けられる、目、があるんです

この人はアクマじゃない！」

「アタリだよ！アレン・ウォーカー！」

試しにそいつの皮膚取ってみろよ、正体がわかるぜ？」

ベリッ！

アレンはもどきの皮膚を取った

その正体は、ファインダーのトマだ

「トマ…！？」

「何…っ」

「そっちのトマがアクマだ神田…！！！」

どうやら、千年公が言ってた“アクマを見分ける目”

ホントだったんだな

そのとき、偽トマの表情が急変する

獲物を見つけた時のアクマの狂気の顔

そして――

ドン！

神田を壁の向こうまで殴り飛ばした

「ぐっ」

神田のイノセンスが弾かれ、床に突き刺さる

「ヒヤヒヤヒヤヒヤ」

「かっ…神田！！」

「悪いけど行かせないよ、アレン」

「うわっ！」

私は、アレンに夜叉を突き付けた

「悪いけど、行かせないって言ったよね？アレン・ウォーカー」

「行かせてもらいます、何があっても！」

「そうかよ、じゃあここで消えろ！アレン

夜叉2陣目灼熱地獄！」

ゴオオオツ！

あたり一面が炎で満たされる

これで、終わりだよ

――！？

「うおおおっ！」

「嘘だろ……！なんでまだ生きてるんだよ！」

「破滅ノ爪！」
エッジ・エンド

「――！」

ギャギャツ　ギャンツ！！

ギン！

！

何でいきなり強くなる？

「だから人間は嫌いだ」

「なんでですかッ！」

「お前に言う必要は無いよ」

つう、アレンの頬から血が垂れる

「ま、いいや

そろそろ向こうも終わるっぽいし、こっちも終わろうか

部下に先越されちゃ癪なんだな

コンバート
夜叉転換」

夜叉の形が変化する

槍から徐々に形を変え、剣となった

「なあ、アレン・ウォーカーお前何でそこまで足掻く？」

「…仲間が大事だからですよ…」

！！！…仲間ねえ

何考えてんだよ私は、こんなのガラじゃねえな

「別に今じゃなくてもいいか…

行きなよ：アレン・ウォーカー」

ドン！

「なんだ！？」

こりゃあ、血の臭い？まさか、もう終わったのか

早いな

「アレン早くしな！」

何してんのよ、私は！ついにおかしくなったね

とりあえずここはまずいな：崩落寸前じゃねえか

誰かさんはまだ行こうとしねえし、ああクソッ

しょうがない！

ガッ

「へ？」

グワッ

「おらよ！仲間とやらのところに飛んでいきな！

お仲間死なせたいの？」

千年公に怒られるのは御免だが、すっきりしねえのは
もっと嫌だ！

あーあ、やっちゃった千年公に怒られるな

でもまあ、2だって弱かねえ、充分だろ

（おーい、2？聞ってるー？）

（何でしょうか）

（私帰るから、イノセンス回収よろしくー）

よし、あとは千年公にどう説明しよう…

第7夜くマテール6く（後書き）

3000字突破！

第8夜〜帰宅〜

「ただいまー」

はあ、疲れたと呟きながらレンはいつも通りに帰ってくる

「なあ、ロード千年公居る？」

「いるよぉーおーい千年公レンが帰ってきたよぉ」

すると何故かエプロンを着た千年公を見つけた

「ヤット帰ってきましたタネ？お仕事はどうデシタ？？」

「スンマセン…失敗しました」

「珍しいねえ〜レン、なんかあったのぉ〜？」

レンが任務を失敗するのは珍しいらしく、千年公もロードも驚いている

「…ちよつとね」

そう答えるレンは心なしかげっそりしているようだった

「レン、大丈夫う〜？」

「うん、平気平気」

そういつて、ロードにレンは笑いかけた

だが、いつものレンの笑顔とは違いどこか悲しげだった

「ホントに大丈夫デスカ?？」

「ホントに大丈夫だよ…」

言っている本人が気づいているかはわからないが

レンの足どりはふらふらとして正直なところ、説得力はゼロに等しい

「やば、忘れてた」

そうつぶやいてレンは鞆を漁り始めた

そして、鞆の中に入っていた袋を出した

「ロード、ハイお土産ー」

レンはロードに袋を渡した

その袋の中には、飴やチョコレートなどロードが好きそうなモノが沢山入っていた

「わお、サンキューレン♪ おいしそお」

嬉しそうにロードは受け取った

そして、早速中に入っていたお菓子を食べている

「ハイ、千年公の分」

レンが千年公に渡したのは千年公に良く似合うであろうシルクハットだ

それは、少しメルヘンチックで店長によると

「これはきつと似合うお客さんいないよー」

とのことだ

だが、それでも似合ってしまうのが我らが千年公

……………想像以上に似合っていた

そして、千年公は気に入ったのか踊り始めた

レンは鞆を漁っているときにあることに気づく

「…………土産の数が足りない」

確かに彼女の目の前にある土産の数は、千年公とロードの分を抜いても

9個しかないのだ、レンはどの土産が誰にあげるものかを確認する
まず、同じモノが入った袋が二つ、これはジャスデビの二人

次に、甘ったるそうな物が大量に入っている袋、これはスキン

今の時点で3人の土産はどれだかわかった

だが、残りの6個は？

ティキ、ルルⅡベル、シェリル、マーシーマ、フィードラ、トラ
イド、マイトラ

この7名の内たった一人だけ土産が無い人物がいるのだ

ルルの土産は、なんとなくで買ってきた紅茶セット

マーシーマは、ダンベル

トライドとマイトラは適当に詰め合わせたモノ

シェリルは、写真キット
デジカメのようなもの

フィードラは髪留め

6名の土産が判明した、そしてレンが土産を買い忘れていたのは

ティキだった

「うわー、どうしよ」

「どうしまシタ?？」

「ティキの土産買ってない…」

「きゃははははは！」

大笑いするロード、だがレンと千年公は苦笑いだ

「どーしよ、千年公」

「ナゼ、我輩に振るのデスカ?」

「…何となく…?」

ロードはまだ笑っている、レンはもしかしたら鞆にはいつても!という

小さすぎる望みを胸にまた鞆を漁りだす

レンは武器が大量に入った鞆を逆さにして鞆の中身を漁る

一人じゃ面倒だと思ったレンはようやく笑い終えたロードを呼ぶ

「おーい、ロードーちよっと手伝ってー」

「いいよおー何すればいいのお?」

「ティキのお土産さがしー」

数分後……

「無いねえー」

「やっぱり買ってなかったかなー」

「あのオーレン、ロード？」

「何ー千年公おー」

「ハンバーグづくり手伝ってくれマスカ？？」

「ねえ千年公もしかして今日の夕食ハンバーグ？」

「エエ？そうデスヨ？」

「もう、一週間はハンバーグ続い…ムガッ」

ロードがレンの口を押さえた

「それ言っちゃダメエ」

不思議そうに千年公が聞く

「どうかシマシタカ？？」

「ふぁんれもねいれふ（なんでもないです）

フォーロふあなして（ロード放して）」

「いいよおー」

ロードはレンから手を離れた

「はあ…」

「そういえばレン」

「何？ ロード」

「前から思ってたんだけどお、レンっていつもそのペンダントつけてるよねえ」

「…！ ああ、コレ？」

そう言って、レンは首にかけているペンダントを見せる

これは、レンが記憶を失う前に神田から受け取ったものだ

…————— 本人はそれを知らないが

「うん、それだよお いつも着けてるからなんでかなあ〜って」

「うーん、なんとなく？ なんか着けておいた方がいい気がするさ」

ガサゴソ

「レン〜何してんのお？」

「鞆漁ってる」

「ティツキーのはないんでしょお」

「うん、もう諦めたよーちょっと探し物」

「ボクも手伝うよぉ」

「ありがとう」

その微笑ましい光景を千年公は見守っていた

（やっぱりハンバーグは我輩が作るとシマシヨウ？）

そして、その日の夕食で、約^{レン}一名が倒れたとかなんとか

第9夜〜夢〜

…ここは？どこだ？

私確か千年公特製ハンバーグ食べて…あれ？どうなったんだっけ？

ああそうだ私、倒れたんだ

…思いだしたら気分悪くなってきた…

！…そういえばここどこ？

私が知らないところ、それだけは分かる

でもここ嫌に懐かしいんだよな

あの壁のローズクロス…黒の教団か

意外とでかいんだな…

迷っちまうよこんなに広がったら、いつか餓死者がでるよ

ハア…この際だ、探検していくかね

確か教団って塔みたいになってるんだよな

！声が聞こえる…？

どこから…？

もしかして、これって私の記憶か？

それなら足が浮いた感じのわけが納得できる

『放せリナリー！』

『だめっ！放したらレン、また神田と喧嘩するでしょ！』

『コムイテメッ！放しやがれ！』

『放したら君レンちゃんと喧嘩するだろう！』

『『いいから放せ！』』

『『絶対イヤだ！』』

何してんだ？すごい声でかいけど…

つかまってんのって、あれ私？…それにあの長髪…

マテールの時の…！！

……それよりなんで捕まってるんだろう

『リナリー放せ！』

あの二つ結びの子、リナリーって言うんだってことは

神田を押さえてるのはリナリーの兄さん？

顔似てるし多分あってるよね

『コムイ放せよテメエ…!!』

ヘリナリーの兄さんの名前はコムイか…

つか、夢でも怖いね 迫力一緒！

やけに生々しい…

で、なんで喧嘩してんのこの人たちは…

いや、私には関係ない

キイイイイン

！？場所が変わった？

今度はどこだ！？わかんねえ！

『誰か起きてる人いるー?!』

『アルマ、いねエと思うぜ』

このチビ達って、あの時見た記憶の――――！

でもここは？なんか沢山水が…

！？水の中に人がいる！

ちゅぷん…

今度は何だよ！！？

『ねえユウ聞こえた？！』

『ああ、誰か起きてんな』

アルマとユウは音がした方に行く…

見ておいた方がいいのか？

『ユウ！やっぱり起きてる！』

『誰だ？』

『えっとここは、“ren”の水槽だよ！』

『ホントに起きてるのか？アルマ』

ren！？今そう言ったかアイツ！

レンは水槽にかけよる

こいつは……——私だ！

「うああああっ！」

ハアツ、ハアなんだったんだ今のは！

私の記憶だよな？鮮明に覚えてる

いや、思い出した！

夢で見たトコだけ、でも、何も知らないよりマシだ

落ち着け、落ち着け！

深呼吸をして、とりあえず落ち着いた

ここは、私の部屋？

誰が運んできて……——？

「うおっレン！起きてたのかよ」

「デビット？なんでここに居んの？」

「つーか、お前うなされてたぜ？平気かよ？」

心配そうな表情のデビット、珍しいねこんな顔もするんだ

「平気、ジャスデロは？」

「ああ、ジャスデロは多分本読んでるぜ」

そういうデビットの手には“もう大丈夫借金返済法！”があつた

「ねえ、デビット」

「なんだよ」

「クロスからの借金そんなに多いの？」

ギクツ、デビットが動かなくなる

なんだ、借金減ってないんだ…もしかして増えたのかも…

なんかここまで来るとクロスって凄いね、普通敵に借金ツケないよ

「おーいデビット？大丈夫？」

ハッ、とデビットは我に返る

「あ、ああ大丈夫だ…」

言葉に元気が無いんですけど、ホントに大丈夫かな？

話題を変えよう、借金の話だとドンドン沈んじやうよ

「ねえデビット今何時？」

「確か：10時半頃じゃねえか？」

「もしかして夜？」

「そうだぜ」

だから、眠いんだね：なる

「デビット今からどうすんの？」

「書庫だ、本読みに」

「私も一緒に行って良い？」

「ああ！」

よし、もとに戻った！

レッツ書庫！

そういえば、デビットに土産あげてないカモ：

「デビットちょっと待っててー」

「おう」

えっと、確かこの辺に……あった！

「デビット！」

私はデビットに土産を投げた！だってそのほうが楽しよ？

「うおっ！なんだよコレ……」

「土産でーす、昨日だか一昨日だかにマテール行ってたからさ」

「サンキュ！」

「うん！」

ズルズル……

「お前何引きづってんだよ……」

「うん？ああコレ？ジャスデロの分の土産♪デビットのと同じのが入ってるの」

引きづっちゃマズイかな？」

「マズイと思うぜ？」

どうこうしてる間に書庫到着

いやー短かったねー

「ねえデビット、話し声が聞こえない？」

「誰かいんじゃないの？」

確かに、聞き覚えのある声が二つ程：

ジャスデロの声は分かる、だがもう一人の方は女の声だということ以外分らない

「「おいジャスデロー！」」

「ジャスデロ、呼んでるよお」

「何？ヒツ！」

「あつ、ロード！何してんの？」

「ジャスデロとおしゃべりしてたんだよお」

「あつ、そうだった！ジャスデロく土産っ！」

ブンっ

デビットと同じように投げて渡す

ゴンッ！

鈍い音が響く、どうやらレンが投げた土産を取り損ね、頭に当たってしまったらしい

「「ジャスデロー!!」
「」
「」

3人の絶叫が響いた…

第9夜〜夢〜（後書き）

番外的な…

第10夜くクロス討伐く

「レン起きてるかー？」

今は朝7時頃、普段のレンならまだ安眠中だというのにデビットがレンを呼びに来た

「起きてるようちよつと待って！」

「おう」

実は二人共睡魔に負けそうなのだ

ジャスデロはともかく、デビットやレンは普段こんなに早く起きない

レンに至っては昼過ぎまでは普通に寝ている

酷い時には丸一日寝ているのだから、

レンにとっては今すぐにでも眠ってしまいたいのだ

だが、人を待たせる訳にはいかない

だから今ちやっちゃんと身支度を済ませていると、いうわけだ

服も着替え終わり、全ての身支度を済ますと

廊下にいるデビットに声をかける

「終わったから出るよー」

「ああ」

レンが廊下で待っている人物には必ず声をかけるようにしている
なぜなら、数か月前ティキが任務だから、とかと

いつてレンの部屋の前で待っていたときに気づかずにドアを開け
気絶させてしまったことがあったからだ

それが軽くトラウマにでもなっているのだろう、

ドアを開けるのが遅くなっている

カチャ…

「デビットおはよー」

「おはよ…」

「…ジャスデロは？」

「まだ寝てるんじゃないか？」

「起こしに行く？」

「そうだな、そうするか…千年公に怒られんのはオレらだもんな」

「うん」

「で、ジャスデロってどこにいんの？」

「部屋にいなかったからな…書庫にいるかしんねーな」

「書庫？またどうしてそんなところで」

「知るかよ、本読みに行ったんじゃねーの？」

「……眠い…」

「言うなレン…オレまで眠くなるじゃねーか…」

「どうやら二人共睡魔に襲われているらしい」

「デビット？」

「んだよ…」

「あんたらってさ、なんでいつもメイクしてんの？」

「ほっとけよ」

「じゃ、いいや」

「(いいのかよ…)」

「書庫着いたよ」

「おい、ジャスデロ？寝てんのか？」

応答はないだが、その代わりに寝息のような音が聞こえる

「「オイ！！ジャスデロ！起きろ！！」」

互いの声で頭が痛い、ちょうどいい眠気覚ましだ

「デビット？レン？デロに何か用ヒツ！」

「今日は千年公に呼ばれてたろ？まさか忘れてたのか？」

「……………」

どうやら忘れていたらしい首をかしげている

「さてと、千年公のといこーよ ジャスデビ」

「さて？3人とも揃いましたネ？」

君たち3人にお仕事デス？」

「仕事って何すればいいの？千年公」

レンが問う、すると千年公はジャスデビにとって最悪な仕事を言

い渡す

「クロス・マリアンの討伐デス？今度は3人で行ってください？」

第10夜くクロス討伐く（後書き）

ただいま原作3刊目ぐらいです

アンケートにも答えてください

第11夜〈任務〉

「へっ?」

「どーゆうことだよ! 千年公! クロスはオレらの標的だろ! ?」

「ヒッ、そーだよ千年公!」

先程言い渡された仕事、クロス・マリアン討伐だがレンはともかく
ジャスデビの二人は絶賛反論中である

「キミ達、イツモ失敗しているノニ良くそんなことが言えますネ
エ?」

そう、ジャスデビの二人と言えばクロスを見つける度に借金をつ
けられる

かわいそうな双子だ

それはともかく、先程からレンの頭には? マークが浮かんでいる

「ねえ、千年公クロスってアレン・ウォーカーの師匠だっけ?」

「そうデスヨ、レン?」

千年公がそう言っている間にもジャスデビは反論を続ける

「おい、千年公！クロスはオレらが捕まえるってんだ！」

「…お黙りナサイ！？デビット？？」

笑っているが、千年公はどうやら怒っているようだ

殺気が痛い……

「…！…スンマセン」

先程から考え込んでいたレンがようやく口を開く

「わかったよ、千年公 その“仕事”受けるよ

都合がいい」

私にもその方が

「おいレン！お前」

すかさずデビットが反論する

「えゝいいじゃん、別に決めるのは私でしょ？

なあ、千年公？」

そう言ってレンは悪戯っぽい笑顔を見せる

これでは、デビットも反論できない

「そうデスネエ？デハ、レン頼みマシタヨ？」

「はいなあ！…で、何で行くのさ？」

「ゲートを出したくテモ、クロスはどこにイルのか
分かりませんからねエ…？」

「頑張って探シテクダサイ？」

「頑張って探せ、ということは――――」

「もしかして、徒歩？」

「そうなりマスネエ？」

「……はい」

「じゃ、さっさと行こーぜ レン」

「うん！」

「目指すは、チャイナ中国だぜ！」

そして3人は中国へ向かうこととなった

第11夜〜任務〜（後書き）

いろいろ頑張りますので、冬休みまでお待ちください！！

第12夜〈謎〉

チャイナ
in 中国

バアン！

「居るかクロスーッ！」

「やっと見つけたもんね！クロス、ヒッ！」

「扉^{ドア}ぐらいフツーに開けようよ…何も壊さなくてもいいのに」

上から、デビット、ジャスデロ、レンの順だ

その時、デビットはベットの上に何かを見つける

「なんだありゃ？」

「何か見つけたの？」

デビットは、ベットに置かれてあったモノを手に取る

「メモ？」

「だね、ヒッ！」

「なにになに：『カメの爪亭にて待つ　byクロス』」

なんか嫌な予感：」

「よッしゃあ！行くぞレン、ジャスデロ！」

「デビットストップ！待って！！」

レンはデビットの襟をつかむ

「なんだよ、レン」

「何か思いついたの？ヒッ」

「あんたら、今までコレで借金着けられたんじゃないの？」

ギクリ、ジャスデビは顔を青くする

「やっぱり、あんたら単純だね」

アハハと、楽しそうにレンは笑った

それは人の暖かな笑顔で、ジャスデビが千年公の仲間になる前には全く向けられなかったものだった

レンの笑顔で気が抜けたジャスデビはつられて一緒に笑った

「で、どうしょっか？ジャスデビ？」

笑顔でレンは言った

その質問の返答は意外なものだった

「とりあえず、行こーぜ！」

もしかしたらいるカモだろ！」

「クロス、ぶっ殺す！ヒツ！」

「さっさと行くぜ！レン！」

（行くんだ…また借金増えるんじゃない？）

何故かはりきるジャスデビ、それに対してレンは諦めた表情だ

（ま、行ってから考えよっ）

「うん！」

数分後…カメの爪亭前にて

「やっと見つかったね〜」

数分間全力で走り続けたというのに、レンは全く息切れしていない
むしろ、元気になっているようにも見える

だが、ジャスデビは肩で息をしていてかなり苦しそうだ

「ハッ…ハアッやっ…見つけたぜクロスの野郎…!!…ゲホッ!
ゼエ…」

「ヒッ!…クロスめ…やっと思つけたよ!ヒッ…ゴホッ!」

二人共言葉が途切れ途切れで、何を言っているのか

結構聞き取りにくい

「「ゼエ…ハア…」」

「ジャスデビ?大丈夫?」

疲れた表情なんて一切無しに、心配そうにレンは聞いた

「…全然…平気だぜ…」

「大丈夫だよ…ヒッ!…」

「…いやいやいや、平気じゃないでしょ!?

二人共、どっかで休まない…」

そう言うては見るが、ここには休めそうな場所なんて見当たらない

しばらくレンは考え込み、不意に顔をあげると

これなら平気だ、と呟くとジャスデビに向き直った

「じゃ、私が“カメの爪亭”行ってクロスの奴が

居るか確かめてくるから、ココで休んどいてー」

言うや否や、レンは“カメの爪亭”へ走って行った

「すいませーん、誰かいますー?」

“カメの爪亭”の前でレンはこの奥に居るであろう

店の店主に声をかける

すると、奥の方から声が帰ってくる

「いますよ、どうぞ中へ」

その返答に甘え、レンは“カメの爪亭”へと入った

「いらっしゃいー!」

店の内装はいかにも、といった風のもので、

レンのような年の者が入るところには到底思えない

そしてレンは、店主を見つけると

いきなり問う

「すいませんが、此処に赤毛の異国の男がきませんでしたか？

私、その人を探しているんです！」

「ああ、その人なら“カメの爪^{ウチ}亭”にツケてった

人だな…確かこんな感じの二人組が返済に来る、とか

いってたよ」

そして、店主はレンにクロスが描いたであろうメモを見せる

(……これってジャスデビじゃん！)

驚いたレンは店主に今までの経緯を嘘を混ぜて話す

「……………というわけなんです…」

すると、店主は目に涙を溜めて、レンに言う

「仕方がない…！アンタに免じてあの人の借金は

チャラにしてあげるよ！」

「本当ですか！？ありがとうございます！」

一体、レンは何を言ったのだろうか…

強面の店主が、大勢 目に涙を溜め、うんうんとうなずいている

数分後…無事に帰って来たレンを見て

ジャスデビはレンに対して謎が増えたという…

第12夜（謎）（後書き）

まだまだ続きますよ！

明日から冬休みですから！

第13夜〜悲劇〜（前書き）

なんちゃってタイトルです
その訳は読んでからのお楽しみ♪

第13夜（悲劇）

「うゝん…」

今は早朝、朝日が優しく照らすなか

世界地図を見つめながら窓辺で風斬レンは頭を悩ませていた

「クロスの奴、何の情報も残さねえとは、恐れ入ったね…」

そう、中国での一件の後クロスについて探しまわったが

これという情報も残さないために、クロス捕獲は一時停止中なのだ

ちなみに今は、宿を借りている

（クソ、何も思い浮かばねえ…どうすっかな）

千年公にゃ怖くて言えねーし、ティキに聞くのはちょっと…アイ
ツ馬鹿だしね…

そうだ！ロードに聞けば…イヤだめだ

あいつじゃ千年公にバラしちまうだろうし…

ハア、と溜息をつく

「レン、お前まだ、ンなことしてんのか？」

レンは振り向く、ジャスデビのどちらかを確かめるためだ

「なんだ、デビットかジャスデロは？」

「まだ寝てるぜ　つーか眠みィ…」

眠そうに欠伸をする

「まだ寝てていいよ？」

何で起きたの？、と言いたげな目でレンはデビットを見る

「いいじゃねえか、たまには早起きしても」

「……何が早起きだか」

ボソリとレンが呟く

ドサッ！

「「あ？」」

音がしたのは、先程までデビットが寝ていた部屋

もっと簡単に言うと、現在ジャスデロが寝ている部屋だ

「おーい、デビット？今の音ナニ？」

「ジャスデロがベットから落ちたとかじゃね？」

「あんたら、17歳でしょ？普通落ちないって」

「……だな」

「確かめに行く？」

「行くか」

二人はジャスデロが寝ている部屋まで急ぐ

そして、部屋の前に着く

「開けて平気だよな……」

「平気だと思うけど……まさかベットから落ちてたりしてないよね」

「知るか……行くぞ」

ガチャ

デビットが扉^{ドア}を思い切り開けた

すると、レンとデビットが想像していた最悪の出来事^{………}が起きていた

「うわー、案の定……」

「オイ、ジャスデロ……ウソだろ……」

二人が想像した最悪の出来事、それはジャスデロの

ベットからの転落だ：

だが、驚くべきはそれだけではないのだ

それは、ベットから転落しようが、熟睡しているジャスデロの根性である

二人は呆れたような表情で顔を見合わせ笑った

ジャスデロが起きたのは、それから約2時間後だという

第13夜（悲劇）（後書き）

どうでしたか？タイトルの理由がなんでそうなったか
お分かりになられたでしょうか

わかった方は、感想の所にお書きください

正解か否か、答え合わせをさせていただきますので！！

ついでに皆さんにお願いがあります！

かなり前ですがお願いしたアンケート、誰でも受けられるので
せめて一度アンケートを受けてください！

そして、お気に入り登録をしてくれている読者のみなさん！

いっかお礼は小説でさせていただけます！

どうぞ、次の話をお楽しみに！

第14夜（行先）

「ああーッッッ！！」

突然大声をあげたレン、その声にジャスデビは二人共顔をしかめている

「ンだよレン、いきなりデケエ声出しやがって」

耳を塞ぎながらデビットがレンに問う

「分かったんだよ、あのクソ元帥の居場所が！！」

地図に顔を向けながらデビットの問いに答えるレン

彼女の手は地図の上に何か図を書いては消し、書いては消し、を延々と繰り返していたが

問いに答え終わると、その手は止まる

「いいから、見てよ二人共！」

笑って二人を呼ぶレン

そして、二人が地図を見ていることを確認すると

レンは誰にでもわかるような超絶簡単な説明をする

「――――って訳だけど…わかったよね？ジャスデ
ビ」

「ああ、わかったぜ」

「デロもわかったよーヒッ！」

レンはホッとした表情を浮かべた

ジャスデビが理解できるのか、よほど不安だったのだろう

「あー良かった、もしかしたらダメかと…」

レンが安堵の溜息をもらすと、デビットが得意そうにこう言った

「テイキと同じだと思うンじゃねー」

「して、ジャスデビ？理解できたんなら言えるよね？」

次の行先はドコでしょうか？」

「「ロシアだぜ！」」

「ピンポーン！じゃ、行こーか！」

「「おうよ！！」」

第14夜（行先）（後書き）

今回ののはかなり短く収まってしまいました

ジャスデロのキャラが良く分からないんですよ…泣

誰か私に救いの手を！！

第15夜く汽車にてく

ガタン　ゴトン　ガタン　ゴトン　……

規則正しい音に揺られ、現在レンとジャスデビの3名は

ロシア行きの蒸気機関車に乗っている

レンに至っては汽車に乗るや否や、数日間の徹夜の疲れが出たの
だろうか

倒れてしまい、デビットに抱き抱えられて乗車したのだ

だが幸い、今日の時間帯は乗車人数が少なかったので赤っ恥をあまり
晒さずに済んだが

普段の駅なら、どうなっていたのかわからない：

いや、きっと汽車に乗るのも苦痛になってしまふところだっただ
ろう

座りながらデビットは溜息をつく

「なあ、ジャスデロ」

デビットは隣に座っているジャスデロに声をかけた

「デビット？　どうしたの　ヒッ！」

「……イヤ、なんでもねエ」

やっぱイヤや、そう言わんばかりのデビットの表情

普段なら、レンがいつも二人に話しかけ楽しくその場を盛り上げるのだが

今は寝ているためどうにもならない

しばらくその場を沈黙が支配する

（レンが起きりゃ、楽しいんだけどな……

何考えてんだよ、オレ……疲れてんのか？まさかな……）

ジャスデロは、外の鳥を観察し、レンは気絶……

デビットにとってこれ以上退屈なことはないだろう

（オレも寝るか……することねえし……）

数時間後……

「……………ん…」

デビットが目を開く、だがレンはまだ寝ていて

起こすわけにもいかない

ジャスデロは？、こちらも先程と同じように外の鳥を観察している

すると、汽車の中にアナウンスが聞こえてきた

《只今、ロシアで御座います、お降りになられる方は足元に

充分お気をつけください》

どうやら、ロシアへ無事に到着したようだ

デビットはレンを起こそうとするが、なんだかバツがわるい

しばらく考えた結果、抱き抱えて下車することとなった

（仕方ねえ…）

ヒョイとレンを抱き抱える、すると何かがおかしいと、そうデビットは思った

（軽っ…！いくら女でも身長はオレら近いんだぜ？

こんな軽いワケ…）

瞬間、デビットは千年公が言っていたことを思い出す

『レンちゃんは、おかしいデスヨ…？』

なにかハ我輩にもワカリマセンが、あの子ハ何かを拒絶し続けて
イル？

おそらく、ソレデ、レンちゃんは時々^{エネルギー}体力切れを起こして

たおれてしまうのデシヨウ？』

(…何かって何だよ千年公)

「おい、ジャスデロ！そろそろ出るぞ！」

「了解！ヒツ！」

ようやく、3人はクロスがいるカモ知れない

ロシアに辿り着いたのである

……約一名気絶したままだが

第15夜く汽車にてく（後書き）

みなさん御休みなさい

第16夜〈追跡〉

ヒュオオオオオ…

「寒ッッ!!」

「冬みたいだね! ヒッ!」

先程ロシアへ到着したのだが、駅から出るや否や

冷えきった風が通り抜けていく

ジャスデビは基本薄着なので、寒いといえども自業自得である

一番寒そうなのは、ジャスデロだ

ジャスデロは、ノースリーブのジャケットに

長ズボン(?)、見ているだけで寒くなる

デビットは、ノースリーブの上に至って普通のジャケット

そしてジャスデロと似たようなズボンをはいている

だが、レンを抱き抱えているのであまり寒くはなさそうだ

微かにレンの瞼が動く

「……………むう…?」

ようやく、レンが目を覚ましたようだ

「よおレン、起きたか」

「随分寝てたね、ヒッ！」

そして、レンは自分の置かれている状況に気がつく

「……………へ？ここどこ？」

「ロシアだぜ」

「さっき着いたんだよ！ヒッ！」

「マジ？ウソいつの間に…」

レンは寝ていたので、汽車の記憶が無いのだ

「なんかもう色々ゴメンなさい…」

「とりあえず降ろすぜ、レン」

「うん、ありがとう」

す、とレンを降ろす

「寒いね…」

「どっか入ろーぜ」

「デロは風邪ひきそうだよ！ヒッ」

3人はあたりを見回す、だが入れそうな店なんて無く
あるものと言えば、草原ぐらいだ

「「次行こーぜ」」

「もうこの際、世界一周でもする？ジャスデビ」

「クロス探しの旅？そんなの御免だぜ」

「デロは、暖かいもの食べたい！ヒッ！」

ヒュオオオ…

「「寒イイイ！」」

i n、ブラジル

「クロス居るかー！」

「今日こそぶつ殺す！ヒッ！」

「…また扉《ドア》壊したね…ハア」

「クロスさんは此処にやいないよ、あんた等ハイこれ」

ジャスデビに女将は一枚の紙を渡す

「「んじゃこりゃー！！！」」

「？どしたの二人共？」

女将はレンに向き直り、優しい口調で言った

「お嬢ちゃんはいいいからね」

「なにがです？」

「あの二人の借金だよ」

「へ？」

良く分からないので、レンはジャスデビのもとへ

駆けより、デビットが見ている物を見る

「わお、凄い金額…12ギニーって…」

12ギニーは日本円に換算すると約24万円、

また、クロスにツケられてしまったのだ…

i n 韓国

「クロスー！今日という今日はぶっ殺す！！」

「もう許さないかね、クロス！ヒッ！」

「……………またツケられる…ハア」

すると案の定、店の奥からゴツつい女将がでてくる

「はい、あんた等借金！」

「…………ハア…」

そう、またツケられたのだ

その後、ギリシャ、ルーマニア、韓国と

クロスを追ったがクロスは見つからず

ジャスデビには、借金が増えたのだ…哀れな双子よ

第16夜〈追跡〉（後書き）

クリスマスの描きますのでお待ちください

第17夜〈皮肉〉

とある宿の一室にて…

「6ギニー、4ギニー、12ギニー、8ギニー、16ギニー…」

「17ギニー、7ギニー…」

「10ギニー、2ギニー、18ギニー」

ハア、と時々溜息をつきながら、ジャスデビとレンの3名は

鬼元帥^{クロス}がツケていった紙束の金額を数えていく

「デビットーそちいくらー？」

「24ギニー…レンはいくらだ？」

「私のところは、えっと…46ギニーだよー

ジャスデロは？」

「デロは30ギニーだよ！ヒッ！」

「全部でいくらだ？レン」

「……………100ギニー…」

「「ハァ!? 100う!?」」

100ギニー…これは全てクロスがレンとジャスデビにつけていた借金だ

だが千年公には話せない、

自分たちには金が無い

クロスの野郎は見つからない

「いっぺん、方舟に戻ろーよ…私そろそろ限界…」

頭を抱え、紙に意味不明な数字の羅列を書いていくレン

心なしか、眼の下が真っ黒になっている

その様子を見かねたデビットがレンに声をかける

「平気か? レン、目の下真っ黒だぜ?」

「…………君等にや言われたく無かったよ…」

そう、ジャスデビといえばティキに

『相変わらず顔色悪イな』と言われているのだ

……………あくまでメイクだが

「「これはメイクだ!」」

見事にハモったジャスデビ、それをレンはテキトーにあしらう

「でさあ、どーする? 本当^{ホント}にクロス探しの世界旅行

できそうだよ?」

アハハ…と悪戯っぽく笑うレン

実はレンは、ある国、を避けながらクロスを探していたのだ

—————その国とは、アメリカ、ジャスデビの故郷だ

(アメリカかぁ…もうあそこしか残ってないんだよね…)

どこか悲しげな表情でレンは思った

ジャスデビは故郷の話をしようとしな

だからといって聞こうとすると、何か他の話に持って行ってはぐらかす

それでレンは二人を察し、アメリカには行かないように、

—————否、近づかないようにしていた

「オイ、レン? どーした?」

デビットの右手がレンの頬にふれる

瞬間、レンは我に返る

「―――！ いや…次行くならドコかなーって…」

無理にも程がある言い訳をするレン

それを見て、デビットはレンの頬のふれている手で

レンの頬を思いつきりつねる

「辛気クセエ面してんなよ、なあ？」

ニィ、といつも通りに笑ってみせる

だが、ジャスデビの表情がひきつっていて

無理して笑っているのが見て取れる

「もしかして、……ドコ行こうとしてるか…バレてる…？」

小さくレンがそう言うと、ジャスデビは苦虫を噛み潰した様な表情になる

ジャスデビとレンの間には沈黙が流れる

だがその沈黙を壊したのは意外な人物だった

「なんかしんみりしてるね ヒッ！」

妙に明るい調子でそう言ったジャスデロ

そして、もう一度沈黙が漂う、だが先程とは違い

重い雰囲気 that 漂っているワケではない

黙っていたら今にも笑ってしまいそうな雰囲気

そうだな、例えるならば、同窓会などでスベった感覚――

と、いったところだろうか

数分間黙っていると、一番最初に耐えきれなくなったのは

「「ぎやはははは!!」」

案の定、ジャスデビだ

レンは、キョトンとしていたがジャスデビの様子をみて

思わず笑ってしまう

「あははっ!」

楽しそう――とは言えないが、先程よりは楽になったようだ

しばらく、3人は笑い転げていたのだが上階が慌ただしくガタガタと音を立てる

3人が硬直していると、天井から剣が突き出てきたのだ

レンは突き出ている剣に見覚えがあった

黒い刀身、見た目は日本刀を思わせる形状

おそらく、持ち手の部分は白い十字が入っているのだろう

そうレンの記憶が正しければ、これはイノセンスだ

「この剣見たことある様な…？まさかね」

「？……レン？どーしたんだよ」

デビットがそう言っている間にレンは自身の鞆から

直径15？はあるであろう鎚を出す

その様子を見たジャスデビは顔を青くする

「……まさか、叩こうってんじゃねーだろうな？」

レンはいつも突拍子もないことをする

だから、レンが夜叉以外の武器を取ったら何をするかわからない

「オイ、レン何しよーとしてんだ？」

「まさか叩くつもり？ヒッ！」

ジャスデビの質問にレンは笑顔で答える

「うん！そのつもりだよ♪」

ジャスデビは硬直する、そして当然の行動に出る

「ジャスデロ！レンのハンマー取れ！オレはあいつを押さえる！」

「うん、ヒッ！」

その頃上階では…

「下の奴らがうるせェ！！」

いきり立つ長髪の男、その隣にはなんかゴツつい感じの男が座っている

そしてその前では鈴のようなものでサッカーのような事をしていく男一名

計3名がレン達の上階にいる

「では、下に行って『うるせェ』といってきたらどうだ？神田」

どうやらレンの勘は間違っていなかったらしい

「マリ、お前が行けよ 説得得意だろ？」

マリと言われた男は、拡張機を耳にあて下の階の状況を探る

『デビット、離せってば!』

『離れたらお前、上にハンマー投げンだろ!? ジャスデロ早くしろ!』

『分かってるけど結構硬いんだよ、ヒツ!』

『投げないって、誤解ですよーっ!』

マリが聞いたのは聞き覚えのある女の声が一つ、

そして、10代後半の男の声二つ

マリは女の方の声を良く聞こうとする

もしかしたら、数年前に失踪した風斬レンかもしれないからだ

だが、レンの声なら神田の方がよく知っている

なので、マリは神田を呼び寄せレンかもしれない女の声聴かせた

実は、レンかも知てはなく、レン本人が真下に居るなんて

思ってもいなかっただろう

だから、レンの声が聴こえた時は神田は信じようとはしなかった
それでも下の階の会話を聞いていると『レン』という単語が
ちよくちよく出てくる

神田はその会話を聞いているうちに

—————やっぱり、記憶がねえんだな…アイツには——

と感じた、マテールの時にも会っているが、それでも

レンが何も覚えていないという、その事実は変わらない

神田は皮肉な薄笑いを浮かべると何も言わずに拡張機をマリへ返
した

マリともう一人の男——デイシャは、神田の心情を察し

ふざけるのをやめ、椅子に座り只、黙った

これ以上神田をイラツかせないためにも…………

数分後 レン、ジャスデビの部屋

「「「疲れた…」」」

先程とは打って変わって、疲れ切った3人は床に寝そべり

肩で呼吸している

このままだと、3人そのまま眠ってしまいそうだ

――――――――――クス…

レンが少しだけ笑った

「「「ぎゃはははっ！！！！」」」

次は3人で大笑いして、借金の事なんか忘れてずっと笑っていた
という

「うるせエな…クソ…」

第17夜く皮肉く（後書き）

何かいろいろ意味不明：

第18夜〈覚醒〉

翌日

チチチツと外の鳥が騒ぎ出す

どうやら朝になった様だ

普段ならレンはまだのんびり寝ている時間なのだが、何故か目が
覚め

二度寝すらもできなかったのだ

こんな朝から起きているレンは当然機嫌も悪いわけだが

偶にはこんなのもいいや、と開き直り今に至るのだ

ジャスデビも各部屋で眠っている

レンは特に行くこともないので窓を開け、外にある庭に目をやる

すると、レンの目に入ったのは黒服の男3名

2名は誰だかわからないが、黒い長髪の男には見覚えがある

（なんでアイツらが…？ やっぱアイツら上の階にいたのか？）

レンが3名を見ていると、その中の1名…もとい、神田が振り返る

一瞬、神田とレンは目が合うが直ぐにそらした

神田は気にも留めなかったのか、ごつい人——マリの後を追う

レンは神田に気付かれた事に驚く

（気配は消したハズよ…なんで気付かれたの？）

ま、いいやと考えることを放棄し天井を見つめる

レンは昨日あったことを思い出す

（そういえば…昨日剣が刺さっていたトコ、どーなってるかなあ
？）

レンはその場所に急ぐ、いや急ぐ必要はなかったのだが

レンから言わせればなんとなく、なのだろう

すると、昨日の穴の部分——剣が刺さっていたトコロには

穴こそ埋まっていたが、その代わりに床に大雑把に折りたたまれた紙が落ちていた

「ナニこれ…紙？」

その紙は掌に収まる程に小さかった、だが広げてみると

見覚えのある筆跡を目にする

その筆跡は、ジャスデビではない事はわかった

なぜなら、日本語で書かれていたからだ

レンは思いつく人間の名前を出してみる

（千年公、ルル、……いやノアじゃないな

他に誰かいたっけ？

上の階にいたエクソシストかな…）

その紙にはこう書かれていた

『数日前、黒の教団の元帥が殺された

内臓の一部が無くなっていたそうだ

俺にはカンケーねえ事だが、レン、テメエが見てると思って書かせてもらう

———死ぬんじゃないぞ』

（これって、神田が書いたモンか？なんで私に…

記憶だって思い出せてないのに…）

レンの胸にはなぜか罪悪感が迫ってくる

いままで、いくらアクマを造っても何とも思わなかった、

人の命なんざ下らねえ、とまで思っていたのだ

ハッ、ガラじゃないなと言、自らに言い聞かせるように呟くレン

レンはベットに横になる、寝れなくても今は少しでも楽になれた
らそれで良かった

だが瞬間、レンに激痛が襲いかかる

「ツツ！…ウガッ……ツクソがアツツ！」

頭に響いてくる音の様なモノ、体の内側からえぐられるような感覚

（なんで…よりによって今何だよッ！）

額から血が滲み、手で押さえても血が流れてくる

焼けるような痛み、この数カ月痛みもなければこんな風にもなっ
ていなかった

（このクソ…ノアがッ！…油断…大敵とは…よくいった…よ）

意識が遠のいていく中、ベットから降りようとする

だが、足がうまく動かない

まるで別人のモノのような感覚

（せめて、ナイフでもありやあ……！）

無理矢理足を動かし、鞆の中からナイフを取り出す

肩で息をしながら、レンはナイフで足を突き刺そうとする

だが、ナイフを掴んでいた手の感覚が無くなり

そして、ナイフを落としてしまった……！

レンは額を押さえている方の腕も感覚が無くなっていくのが

微かに分かった

目と鼻の先にあるナイフ、これさえ自身に刺せれば……！

レンは、ナイフを掴もうと手を伸ばす

震えて感覚も分からない、そんな状態でもレンは自分のノアを、
拒絶、した

皆と居るのが嫌なわけではない、ただレンは今を好きなように生
きたい

それだけだった、ノアなんかに人格まで侵されることだけは嫌だと

例え記憶が戻らなくても、皆と一緒に居たいと、思った

その時廊下から誰かの足音がした

音が重なって聞こえる、おそらく複数いるのだろう

そして、扉^{ドア}が開く音がした

「レン居るかー？」

「ヒッ！準備できたようヒッ！」

聞き覚えのある声がレンに聴こえた

だが、レンは助けを呼ぼうとはしなかった

むしろ、来ないでという意志の方が強かった

あの二人には見られなくなかった

いくら一緒に居るのが楽しくても

どんなに大切でも

こんな無様な姿は見られなくなかった

だから、気付かないで：そのまま部屋に戻って：とレンは願った

だが、その全ての願いを裏切るのが神だ

「おい、レン？居ねエのか？」

レンには二人が何をしているのか分からない

その時、ジャスデロの高めの声がレンの近くで聞こえた

「レンーどこ行った？ヒッ」

「なあジャスデロ、なんか血の臭いしねエ？」

「？……ホントだ血の臭い…ヒッ！奥の方からだよ！」

おそらく、あと10歩程でレンのところへ着いてしまうだろう

「……………なん…で…」

耳を澄ましても聞こえなさそうな程に微かで小さな声

レンの意識が遠退いていくその時

「オイ！レンしっかりしろ！」

誰かに抱きあげられ、頬を叩かれている

それだけは今のレンでも理解できた

だがその虚ろになった目では、それが誰なのかまでは分からなかった

視認こそできなかったが、その声はいつも聞いていたから

誰だか判別できる

「……………デ…ビツ…ト…?」

微かな声だが、これがレンの今の精一杯でこれ以上は喋れなかった一瞬だけ聞こえたのか、デビツトはレンの方に顔を向ける

その表情には、後悔と怒りが混ざっていた

「…なんでオレらを呼ばなかったんだよ?」

レンは声がでない、だが口だけなら動かせた

ごめん、と口だけを動かして伝える

「病院いくぞ、ジャスデロ! レンの荷物持てっか?」

ひよい、とレンを抱き抱えるとレンの荷物をジャスデロに投げる

「うん持てるよーヒツ! 真っ直ぐ行けば病院だよ!」

病院、その単語を聞いた時レンの左手が動いた

不意に3人の前に方舟のゲートが出てきた

「「方舟^{はこ}ォ!?」」

レンはそのことを説明しようとするが、その前にピエロの様な手に引っ張られ

3人とも引きずられて行った

方舟^{ハコ}の中

「千年公オ!!」

3人を引きずり込んだのは千年公だ

ジャスデビはパニック状態でレンの事を説明しようとするが
事が色々とあやふやになっている

とりあえず、ジャスデビに千年公はついてくるように促す

レンの意識はそこから闇に消えた――――

第18夜く覚醒く（後書き）

次で色々飛ばします

第19夜〈意識〉

千年公がジャスデビを連れてきたのは、真っ白な部屋

「さア、入ってクダサイ？」

「千年公？なんだよこの部屋……」

「白ばかりだね！ヒッ！」

まあ、ジャスデビが疑問に思うのは無理もない

一面真っ白な部屋、ベット以外家具も無く

普段雑務ばかりを行っているスカルが3名もいれば

おかしいと、それ位は感じるだろう

千年公はジャスデビをベットの所へ連れて行き

デビットにレンを降ろすように促した

「さてと、後はスカルに任せマシヨウ？」

「……………デビット？？ドウかしまシタ？？」

「……………いや、なんでもねえ」

ジャスデロ、行くぞ」

……………暗い

体は痛くない、視界もハッキリしていて良く見える

（なんか、現実感ねーなあ…どこよ、ココは？

千年公とジャスデビは？皆何処？私はどこに居るの？）

不意に視界が明るくなり、レンの目の前に男が現れる

その男は、レンと同じ藍色の髪に黄金色の目、褐色の肌

そして額には聖痕、その姿はノアそのものだ

だが、レンは今までこんな人物を目にしたことはない

「あんた、誰よ？」

レンはその男に問いかける

すると、レンの前の男は一瞬呆れたような表情になり、

ハアと溜息をつくとレンの問いに答えた

「オレはお前の中のノアだぜ？レン、お前のな

ついでに、ココはお前の精神世界だ、オレがココに連れてきた」

男はレンが聞いてもいないのに、レンが疑問に思っていたことを

次々と話していく

（……こいつが…ノアだって？こんなお喋りな奴もいんだね）

「それで？あんたはなんで私をこんなトコに連れてきたの？

ノアさんよお？」

レンが嫌味が混ざった声で、ノアに問う

「なんで、か…お前に守ってほしい、約束、がある」

「…また、約束、ねエ…で？その、約束、って？

くだらないモノなら、守らないよ？」

諦めきった表情でレンが言う

「別にくだらなくはねエ、14番目からの頼みだ」

「ああ、それなら知ってるよ？多分

『またオレが戻ってきたときには、手を貸せ』でしょ？」

ノアは驚愕の表情を浮かべ、そして直ぐに安堵の表情へと変わる

「なら、話は早い

レン、お前にはいい加減ノアとして覚醒してもらう」

そしてノアはレンの頭に手をかざす

瞬間、レンはまたあの痛みに襲われる

「うがあ…ッ！」

そして、現実へ無理矢理意識を引き戻される

「「「?!?」」」

3人が部屋を後にしようとした瞬間のことだった

ジャスデビはレンに駆け寄ろうとするが、千年公が二人を捕まえ

直ぐに、部屋から出る

「なにすんだよ千年公！」

「なにすんの千年公！ヒッ！」

反論するジャスデビを千年公は睨みつける

「見なかったんデスカ？？あの子の周りにつかせていたスカルが

一瞬で粉々に消滅されてイルノヲ！？それに……」

千年公が黙りこみ、険しい表情になる

「「それに、なんだよ千年公」ヒッ」

若干機嫌が悪くなった様で、ひねくれたような喋り方になっている

「それに、あの子の周りニハ黒い霧の様なものが取り巻いていた
のデス？」

離れなかったらドウなっていたコトカ……？」

千年公はそう言いながら、扉^{ドア}の鍵を閉めた

扉の向こうからは、何かが壊れていくような音が絶えず続いている

「とりあえず、2，3日したら様子を見に来まショウ？」

ほら、さっさと行キマスヨ？ジャスデビ？」

（あの子のノアが覚醒したのなら…どうやって彼を押さえマシヨウカ？）

彼は『14番目』と仲が良かったデスカラネエ『14番目』側に
なりかねマセン…

どうしたモノデシヨウ？）

千年公はジャスデビの背中を押して、その場を去った…

第19夜く意識く（後書き）

だめだこりゃ…

ああ、誰か私に文才を！

第20夜〈memory〉

数日後

「千年公、レンのトコ行こーぜ」

「もう二日はたったよ！ヒッ！」

相変わらずの登場をするジャスデビ

あきれ顔の千年公がのっそりでできて、ジャスデビに何かを投げる

「これを持って先に行ってイテくだサイ？我輩も後で行きます？」

「なんじゃこれ、鍵？」

「あの扉^{ドア}のじゃねえ？ヒッ！」

「それは、レンちゃんがイル部屋の鍵デスヨ？それを使って開けてくだサイ？」

「了解！」

「……………ははっ、私はとんだ化け物になっちゃたなあ」

窓辺に座り、ハアと溜息をつくレン

その肌は褐色に変わり、目の色は美しかった青から獣の様な黄金色へと

変化し、額にはハッキリと聖痕が浮かび上がっている

おそらく、ノアを押さえれば元の姿に戻るのだろうが

レンにはその方法は分からない

足元にはスカルの残骸、レンが消滅させてしまったのだ

レンは覚醒した時のことを覚えていた

自らがスカルを消滅させたこと、

部屋の中の在りとあらゆる物を消滅させたこと、

全てを鮮明に覚えている

黒い霧は、レンが目覚めたときレンの体内に入って消えた

その時、レンの背後から何かを回しているような

金属音がした、レンの背後にあるのは扉が一つだけ

しばらくすれば収まるだろうと、レンは外に目を向け

草木を見ていた

起きてからずっとそうしていたのだ

目を伏せ、じっとしていると後ろに誰かの気配を感じた

レンは振り向かずに、部屋に落ちていたガラス片を投げつける

「うおっ！なんだよ…ガラス片？」

「危ないね！ヒヒッ！」

その声の主はジャスデビだ、レンが投げつけたガラス片は見事にデビットの真横に突き刺さっていた

「……ジャス…デビ？」

レンは思わず素っ頓狂な声を出してしまう

数秒の間レンはキョトンとしていたが、ジャスデビと目が合うと足から力が抜け

その場にしゃがみ込んでしまう

「レンじゃねーか！」

「元気そうだねヒッ！」

「元気そうデスネエ？レン？」

「「おう！？千年公！？？」」

3人の台詞が見事に被る

千年公が面くらっていると、ジャスデビがレンの変化に気づく

「レンの目の色、変わってる！」

「肌の色もかわってるよ！ヒッ！」

「聖痕もハッキリ出てますネエ？」

「なんか変わったの？違和感ないけど…」

何が変わったのかと逆に質問をするレン

「まァどーでもいいだろ、レン立ってつか？」

レンの前に手を差し出すデビット、レンは手を取り立とうとする
…が

ガクン

「「はい？」」

「おい、お前立てなくなってるじゃ…」

笑ったまま凍りつくレン

「…：気のせいじゃ…？」

再度立とうとする、だが足に力が抜けてるのか途中で膝が折れる

「おい、レン動くなよ」

よっと、デビットはレンを抱き抱える

「ちよっ！デビット？」

「立てねー奴が文句言うんじゃないねえ」

「…：ゴメン」

「二人共、早く来てクダサイ？」

「ヒヒッ皆来てるよ！ヒッ！」

第20夜〈memory〉(後書き)

くもんがーー

第21夜〜変化〜（前書き）

久米島に行っていたので更新遅れました！スンマセン（泣）
では引き続き21夜お楽しみください♪

第21夜〈変化〉

「ねえ、皆集まってるってなんで？」

レンがジャスデロに聞く

「なんかロードの宿題ヤバいんだって！ヒヒッ！」

ロードは千年公の金でお嬢様学校に通っている

その学校の宿題が多いのか、ロードが溜めているのかは

誰にもわからない、だがその宿題が問題なのだ

宿題の量がハンパなく多いのだ…机の上にミニエベレストが出来るほどに

しかも、レンは仕事の後にロードが部屋にやってきて

『レン〜ティッキーがやったトコの宿題の直し手伝ってえ〜』

と、毎度毎度ティキの野郎の尻拭いをさせられるのだ

それを思い出したレンはハア、と溜息をつく

三人の前を歩いていた千年公が不意に立ち止まり、そしてゆっくりと振り向く

「そういえば、三人共クロス討伐のお仕事はどうしまシタ?」

「「おう、直球!」」

三人の声が見事に揃う

千年公は笑っていた、いつにない満面の笑みで

三人の顔は緊張でひきつり、そして見る見るうちに血の気が引いていく

「「「……………」」」

「……………」

しばしの沈黙、それが三人の恐怖を増大させる

千年公は先程から笑顔のまま表情を変えない

すると、――

「ちゃんとお仕事なサイ!!?」

と、怒りの声を放つ千年公…三人は

「「「すみませんでした!」」」

と三人並んで頭を下げる

それを見た千年公はフウ、と溜息をつく

「まア、いいデス？」

と、結構あっさり許してくれた

千年公はレンの方へ目をやる

（まだ彼は出てきてイナイようデスガ…？）

とりあえずまだ警戒ハしていた方がいいデスネ？）

「レン？？」

千年公に呼ばれたレンは、とりあえずそちらを向く

「何？」

「とりあえず着替えてきなサイ？」

現在のレンの格好は、白いブラウスに、黒の長ズボンのハズだが

霧の所為でその服は破れていたり、斬れていたりする

ある意味ホームレス状態の時のティキよりひどいと言えるだろう

「じゃ、着替えてきまーす」

先行っててー、と走っていくレン

千年公がぼんやり呟く

「あの子：変わりましたネエ？」

「「なにが？」」

千年公の独り言に反応するジャスデビに千年公は

「殺伐とした雰囲気は抜けているんデスヨ？」

それともあれが素デスカネエ：？」

三年前のレンは千年公やノアを警戒して、常に殺気を放っていた誰かに話しかけられようものなら、直ぐにその場を立ち去り

完全に心を閉ざし、目はガラスの様に冷たく千年公にすら話はしなかった

当時レンの声を聞いたのは、方舟に來た時の数回ぐらい

だが現在は普通に話し、笑い、当時の記憶が嘘なのではないかと思える程になっている

……………現在でもシェリルとは一切話はしないが

「「？」」

「ま、いいデショウ？ほらほらさっさと行きマスヨ？」

何が何だか全くわかっていないジャスデビ、千年公はその背を押して急かす

数分後くくく

「お邪魔しまーす♪」

ガチャ、とレンが扉^{ドア}を開けて呑気に入ってくる

すると目の前に広がるのは、本の山：レンの思った通りミニエベレストがそびえたっていた

エベレストの向こうから、千年公の声がした

「今夜は徹夜でス？」

「ねえ、チョットまさかオレ呼んだのって宿題のため？」

レンは声が聴こえた方を見る

「げ：何やってんのティキ」

そこには千年公以外に、ティキ、そしてロードがいた

「「「！」「」」」

レンの目の前に居る三人は何故か硬直している

「なんですか、皆さん固まっちゃって」

率直にレンが疑問を口にするのとロードが

「だってレンが髪おろしてんのって珍しいからねえ」

と言った

千年公は

「こんなトコにその格好デスカ…？」

と、呟く

着替えてきたレンの格好は紺色の着流しにサラシ、黒の股引きで
珍しく

その長い髪をおろしているのだ

普段のレンは、ブラウスに長ズボンと常日頃似たような衣服を身
につけている

以前千年公に

『こんな浴衣きてみまセンカ？…』

と勧められたが、絶対嫌だと断っていたレンが、着物を着ている
のだ

そんなに珍しいのか、とレンが自身の格好を見ているとき

バァン！

「「「「？」」」」」

四人が扉を見る…と入ってきたのはジャスデビだ

四人は、ああ…なんだこいつ等か、と言わんばかりに視線をそらす

そしてまた話を始める

「千年公なにしてんの？」

レンの問いにロードが答える

「僕の宿題だよお、レンも手伝ってえ」

応、とレンが答えるとロードが自分の隣の椅子を指さす

「ここに座れて？」

笑いながらそれに答えるレン

椅子に腰を下ろすと、ロードから終わっていない宿題を受け取る

そして、宿題を受け取ると中から算数のモノを取り出し、

一気に進めていく、するとテイキが

「すげーな…つか、早っ！」

感嘆の声をもらす

千年公や南瓜傘、ロードが呆気にとられるなか

「ロード、算数一冊終わったよ」

と、次の宿題をしながらレンがロードに宿題を渡す

パラパラと、ページを捲って確かめるロード

「うそお…全部あつてるよお」

と、千年公とティキに見せる

「すごいデスネエ…？」

「ナニコレ…」

と、こちらがワイワイ楽しくやっている、レンがあることに気がつく

「ねえ…なんか向こうの空気が重いんだけど…？」

レンが目をやったところは、ジャスデビがいじけている場所

入口の前だ、よく見ると何かぼそぼそと会話をしている

「…なあ、やっぱ来ない方がよかったんじゃないやねえ？」

「なんか無視されてるし…ヒツ…」

「……どうする？」

「とりあえずでよーよ……ヒツ」

ハアア…と重い溜息をつきながらのっそり立ち上がる

ティキはそそくさと出ていくわ、ロードと千年公は宿題やってるわ

ジャスデビは空気重いわ、私にどうしろと!?

レンはパニック状態である

ジャスデビが出ていったとき、レンの混乱を押さえるかのように

頭に声が響く

(少し…体を借りるぞ、風斬)

その時レンの周りを、黒い霧が包む

「「!」」

「レロツ!伯爵タマ〜!」

すると、霧の向こうから声が聞こえる

それは、レンの声ではなく、男の声

霧が散っていくと、中に居る人物の影があらわになる

完全に霧が消え、視界がハッキリとしてくるとロードと千年公は絶句する

「な…んで？」

「貴様…！『0番目』！我輩に何の用デスカ…！？」

『0番目』、そう呼ばれた人物は、千年公の反応を嘲笑うかのよう

ハッ、と笑う…そして、千年公に言った

「当然、きまつてるだろ？お前らを殺しに来たんだよ！

………じゃなくてよお、ちよい話があつて出てきたんだが

オイ！ちよつと？話し聞いてますかい？」

戦闘態勢に入っていたロードは警戒を解く

千年公も『0番目』には今は攻撃されないと判断したのか
構えを解く

「ところで話しトハなんでショウ？『0番目』…？」

「0番、0番言うんじゃねえ、オレはロストだ

番号で呼ばれんの嫌いなんだよ…」

がりがりど頭をかくロスト、千年公が今現在もつとも警戒していた人物だが

そんな風には到底思えない

「デハ、ロスト…話しトハなんでシヨウ？」

「ああ、それはな――――――」

第21夜へ変化へ（後書き）

只今5巻付近へ♪

にやははへへ

♪ レンが着ている着流しというのは、ぬら孫みたいな感じのものです

第22夜〈真実〉

「話しトハなんデスカ?？」

「ああ、それはな：アイツの――『14番目』のことだ」

『14番目』唐突に出された名前、34年前にノアを裏切った者
奴の名を出した時、ロードと千年公は、一度怯んだ

34年前に千年伯爵、ロード以外のノア、ロストを含め12名を
殺害した14番目

千年伯爵にとっては、ロスト以外の大きな脅威だろう

ロストは続ける

「どこかにアイツの気配がある：『14番目』は――」

一度言葉を切り、ロードと千年公に背を向け続けた

「『14番目』は、ネアは近い将来またお前らの脅威となる

そして、オレ等はネアの遺志を継ぐ

だが、オレ等はなにも、ネア側につくと言っているわけじゃねえ
もしかしたら、お前等側につくかもしれない

その時になったらどちらにつくか

『私』と『オレ』で相談してから決めさせてもらう」

千年公とロードが茫然とするなか、ロストは気づいていた

――――誰か盗み聞きしてんな

それが複数人居ることはいくら完全体でないロストでもわかる

カツカツと、この部屋から出るため

否、誰がいるのか確かめるために扉に向かい歩を進める

途中で『ロスト』の姿は霧に消され、その姿は『レン』へと戻っていた

扉を開け、レンは千年公に言った

「『私』は『オレ』、『オレ』は『私』なんだよ…千年公」

扉を閉め廊下に出ると、『ロスト』が予想した通りに人が3名

『レン』は彼らの顔を見ると苦笑いする

「もしかして、全部聞いてた？ ティキ、ジャスデビ…」

3名はバツが悪そうに、レンから視線をそらす

おそらく、ロストの話は初めから最後まで全部聞いていたのだろう

ティキの表情は相変わらずのお気楽のままだが

ジャスデビは納得いかねえといった表情

否、納得なんてしていないのだろう

あちゃー、とレンがもらす

（やっぱ全部聞いてんな…どーするかなあロスト？）

レンは自身のなかに居るロストに問う

（オレが今出て説明する、その方がわかりやすいだろ）

（うん多分ね、体借りる？）

（ああ、借りさせてもらう）

黒い霧がレンを包み込み、その数秒後に霧が消え『ロスト』が顔を出す

ティキ、ジャスデビはロストを見るやいなや大声で叫んだ

「「「レンはどこいった!？」」」

ロストが説明しようとするが目の前で繰り広げられる3人のみの

大論争、ロストが入りこむ隙間は無い

このままで良くね？、と適当な考えが『レンとロスト』に浮かぶ
大論争をよそに、『レンとロスト』は話を始める

（なあレン、目の前のノアって今の『絆』と『快樂』か？）

（そうだよ、目の前の二人組が『絆』、あの貴族みたいな人が『
快樂』）

（へえ…そういえば『夢』って転生してなかったな、34年前か
ら同じ姿だった）

（『夢』ってロードのコトだよな、じゃああの子30歳超！？）

あーだこーだやり取りを続けるうちに、大論争は終了していた

ティキに至っては、仕事の前だというのに疲れ切り

ジャスデビはまだ、二人でああじゃねえかこうじゃねえかと

言い合っている

『レンとロスト』がどういった者なのか、扉越しに聞いていた

話で理解できるはずなのだ

だが、ティキには学がない…ジャスデビも同じ様なものだ

ロストは、のんびりその様子を見ていた

やっぱり変わんねえもんなんだな、とぼそつと呟く

ロストの記憶にあった、昔の様子を思い出してだろう

その目は優しく、当時の彼の姿が浮かんでくるようだった

すると、ジャスデビのやり取りは終わり

今度はティキに絡んでいる

ロストはその光景を見ながら、自身が死んだときの事を思い出していた

『もう思い残すことなんざねーし、さっさと殺せよ…ネア』

『…なんでそんなに死に急ぐ？ロスト』

『別に…急いでるわけじゃねえよ、ただ…な』

『ただ、なんだ？』

『オレはもう限界なんだよ…思ったように体が動かねえし』

オレに今大事な人間はいないからな』

『そうか…』

『ああ、オレは同族を、ノアを殺しすぎた』

エクソシストも殺しちゃった…

大事な奴等が今どうしてるかなんぞ、わかんねえ…

多分怨んでんだろうなあ』

『さよならだ…ロスト』

『ああ…』

思い出、というにはあまり良いものではなかったが

ロストにとっては、記憶のなかで最も忘れてはいけない時だ

ネアに殺されたのは自身の意思だ、アクマなんぞに殺されるより
マシと

彼なりに考えた結果だ

が、心残りがなかったと言ったのは嘘だ

彼がエクソシストだった頃に二人の男女がいた、

彼等とロストは仲も良く、彼等にできた子供にも会った

だが、ロストは彼等を教団を裏切った

それでも、彼等は戻ってきて、と言った

その約束が守れなかったこと、只それだけが心残りだった

顔も、名前すら浮かばない彼等のところへ

彼は戻りたくても戻れない、

否、始めは戻るつもりなんてさらさらなかった

なぜだろう、死ぬ寸前になって思い出すのは…

それが、彼がネアに殺された時の最後の意思だった

（ヤベェ…泣けてきた、レン悪いが戻る）

黒い霧が再びロストの周りを取り巻く、そして黒い霧が晴れた時

元通りにレンが姿を現す

「もー限界…休ませて」

なぜかグデグデに疲れ切っているレン

どうやら入れ替わりには相当の体力が必要らしい

レンはふらふらと、自室に戻っていった

その日、ティキは仕事へ、ジャスデビは延々と言い合っていたらしい

第22夜〈真実〉（後書き）

ロストさん登場！

主人公紹介パート2！

登場人物紹介パート2！それでは始まり始まりイー！

風斬レン

16歳 女 「16歳らしいけど、私の資料偽装モノだからー」

ホントにそうか、わかんねえんだよ」

誕生日 7月10日

役職 元エクソシスト臨界者、現在ノアの一族『0番目』

能力 イノセンス夜叉の取り扱い、

ノアの黒い霧の能力

好きな物 サラダ 「さっぱりモノ好きなのさ！」

嫌いな物 油物 「…ノノコメントで」

身長 163? 「小さくて悪かったね！」

体重 36? 「拒食症って言われたよ、千年公に…なんだからあ？」

好きな者 基本的に嫌いな人はいない…ハズ

「変態だけは無理だね…特にシェリルは無理ッ！」

嫌いな者 シェリル 変人、クロス

「思い出すだけで虫唾が走る…」

武器 夜叉 「槍なんだけど、剣やらナイフやら転換できるよ

「今気に入ってんのは、剣かなー」

趣味 昼寝 「よく部屋で気絶してんの、これが結構ツボなんだ」

一言 「まだまだよろしくね！」

さあさ、次に参りましょー！

ロスト・ディアル

? 歳 男 「歳なんぞ忘れた、でも大体40年前に一辺死んだ…」

「ハズなんだけどなあ？」

誕生日 6月26日

役職 一世代前のノアの一族『0番目』、元エクソ
シスト

能力 イノセンス夜叉の取り扱い

ノアの黒い霧の能力

好きな物 魚介類 「海が好きなんだよ」

嫌いな物 茸 「椎茸とかゼツテー食いたくねえ！食感がチ
ョット…な」

身長 178? 「なんか微妙な身長だよなあ…」

体重 54? 「重くもなく、軽くもなく…」

好きな者 別に 「そんなん気にしてねえぜ」

嫌いな者 欲デザイアス 「キシヨイからな…代々」

武器 夜叉 「なんで使えるかって？オレがエクソシ
ストだったからだ

つーかまず、元々オレのだし当然だろ？」

趣味 釣り 「海釣りは最高だぜ！」

一言 「あー…まあ、宜しく頼むぜ」

最後に主人公共から一言！

「なにが主人公共だよ、駄文作者が…」

おーおー怖いデスネエ でもほっとく

「ほっとくなああ！こんの野郎オ！」

（以下略）」

さてさて、大変長らくお待たせいたしました

主人公、風斬レン、およびロスト・ディアルの挨拶です

「しばらくの間ですが、駄文作者、および私達を宜しく！」

「オリジナルの設定ばっかで読みづらいだろうが

最終回まで見てくれよ！」

主人公紹介パート2！（後書き）

ロストさんの死因は斬死デス

10000アクセス突破記念番外！ ～親睦会～（前書き）

今回は番外！

今年もよろしく！

今回の番外はレンがノアになって一カ月の出来事です

レンのキャラが変化しているかもしれませんが

3年前のレンの性格だと思ってくださいな！

10000アクセス突破記念番外！～親睦会～

「さてさて？？デハ、始めまショウカ、皆さん？」

「」「」「おう！」「」

「……………」

超ハイテンションな千年公、ロード、ジャスデビ、ティキ

だが、それを無表情で見つめるレン

彼女の目にはパーティをしようとしている彼等の姿は映っている
のだろうが

それがどうした、といった風でもない

彼女が来てからの一カ月、千年公がレンは周りの者と一切話をし
ようと

しないことと、レンが方舟にきてから一カ月たった

ということを無理矢理結びつけ『親睦会』という名目で

少しでもレンが周りと接する機会を作ろう！と千年公が企画した
パーティだ

そんなこととはいざ知らず、否興味がないレンにとってはそれは

どうしてもよくて、関係のないことだった

それを決定づけるかの様にレンの視線はどこへやら

どこか向こうの空をみている

「あのく、レン?? 貴方もこちらへきたらどうデスカ?」

レンのために企画したパーティだというのに、彼女は千年公の言葉に

首を横に振り、行かないと伝えた

千年公は残念そうな顔をし、仕方がありませんネ?と呟くと

他のノアの方を向いてパーティを始めた

ワイワイとあちらが騒いでいる中、レンは窓に左足を立てて座り

窓の外をぼんやりと見ている

窓の外には方舟特有の白煉瓦で造られた南国の様な風景、

風が吹くわけでもない、鳥がさえずるわけでもない時間が止まった様な印象を受ける

じいーと、煉瓦の町の花壇の花を見ながらレンは思った

―――――あの人…蓮がどうか言ってたな…

と、それはレンの記憶でありそして、レンの記憶ではない、思い出
彼女の記憶は無い、だが記憶を消したのは彼女

つまり、彼女の記憶は彼女自身で消した…というわけだ

そして、今現在レンに戻っている記憶——それは

——蓮華の花ってまるで私達エクソシストの様な…

そう言った清楚な女性の姿、そしてもう一つ

——帰ってこいよ、わかったな？

と、言った黒髪長髪の男の記憶…確か長髪を高めに結っていた

女性の記憶はだいぶ昔のもの、男の記憶はかなり新しいものだ

いろんな記憶を振り返っていると、かなり近くから視線を感じた
のでそちらを向く

見てみるとそこに居たのはノア独特の黒い褐色の肌、短めに切っ
た黒髪の

10代位の少女ロード、レンは知らないが実はノアの長子である

レンがロードの方を向いている事を確認するとロードは

「千年公特製生チョコケーキ、食べる？」

と聞いてきた、レンは必要ない、というようにロードの頭をなでた
ロードはレンになでられるなんて、思ってもみなかったのだろうか
いや、なでられた事に驚いているのではない

本当に驚いていることは

—————レンが僕のこと見てる…？

ということである、確かにレンの目はロードを映している

だからといって、本当にロードの事を見ているのかレン以外にわかるハズも無い

だが、レンの目はどこか暖かく普段の様に冷たく殺伐としている
ようには

感じられなかった

ロードは余程レンが自身の事を見ている事が嬉しいのか、それとも
なでられたことが嬉しかったのか、先程からしきりにレンにケー
キを

食べさせようとしている

レンはいらないとずっと、首を横に振ったり、あっちに戻れば？と
向こうを指差したり、色々やってロードに対抗したが

ロードは引こうとしない

だからレンは最後の方法として

「……………食べないから…ロードが食べな…」

と小さく言った、がやっぱりロードは引こうとしない

レンは言葉ではダメだと判断し、ロードを抱え

千年公の方へと運ぶ

そして千年公の方へつくと、千年公の肩を叩きロードを渡し

扉の方を指さす

これは「帰っていいか？」という言葉のジェスチャーでいつもこれで通用する

千年公がそれを受託するとレンは扉へ歩いて出て行った

結局千年公の「親睦会」は失敗したという

10000アクセス突破記念番外！ ～親睦会～（後書き）

次回の更新は遅れるかもしれません

皆さんスイマセン！

第23夜〈決意〉

「仕事お？」

頭をガシガシかきながら、寝起きのレンが寝巻のまま千年公に言い返す、

なんとも不満そうな口調である

——なんなんだよ全く…こっちは寝起きだってのによお、
かったるいったらありやしねえ…

つーか何で起こしておまけに部屋から出なきや…

クドクド考えていると千年公がそれを遮るかのように

唐突に話を始める

「—————というワケデスから、教団への潜入頼めますか？
」

ハア？とレンが言い返す

話を聞いていなかったのか、それとも—————？

千年公は始めから言い返す

「ティエドールと、クロスの目的を探るためニ

黒の教団に潜入してくれマスカ？？もちろん、貴方にとってもメリットがアリマス？

どうしマスカ？？」

レンはふーんと思える、そして数秒後顔を上げる

「わかったよ、黒の教団だな？

だけど、私は顔を約二名に見られている

どーするの？しばらくロストは出せないよ」

淡々とかつ冷静にレンは千年公に告げる

レンが告げた言葉の中には条件があった

1、ロストは出せない

2、レンの素顔で行けばエクソシストに疑われる可能性がある

この二つだ、レンにとってはこの仕事、記憶を取り戻す絶好の好機だ^{ンス}
機だ

千年公はむーんと思えながら、ふと何かを思い出したかの様に

レンを指さす

「――貴方、霧をどこまで使いこなせマスク?。」

「ハイ?」

仕事とは関係ないことを聞かれレンは啞然とする

それでも、答える

「変装位ならできる…と思うけど…?。」

「できるのデスカ!??、よかった…それなら何とかかなりマスネ
エ…?。」

「――何とかなる?、千年公^{コイツ}なに考えていやがるんだ

全く掴みどころのない道化だ、と心の中で舌打ちする

ギリ、と歯ぎしりをする

「――なんで私が…!」

レンの姿がロストになる時、彼等の周囲には黒い霧が漂う

これは、変化の前触れであり、そして変化を促すもの

霧がレンの体を分子レベルに分解し、ロストの体へと再構築する

レンにとってロストに体を貸す、ということは

膨大な体力を使用し、失敗した場合のリスクが計り知れない

多少の怪我なら一瞬で治る、だがレンの再生能力には当然ながら限界がある

レンは気付いていないかもしれないが、彼女のガタは恐らく遠くはない

——いざとなれば、アイツら全員殺せば……

だがと考え直す、もし失敗したら？まずロストのようになることは間違いない

——私は記憶を思い出さなきゃな、思い出すまで千年公に

コイツ

とりあえず従うしかない……か

「変装して潜りこみゃいいんだね？」

必要最低限、そして彼女の目は真っ直ぐに千年公を見ていた

千年公はある錯覚を起こす

——まるであの時のロストではありマセンカ……？

やはり、レンを連れてきたのは正解デシタネ？

ニツコリ笑うと千年公はレンに教団の資料を渡す

受け取ったレンは、着替えてくる、と言い踵を返し自室へと戻る

——私が利用されるだけだと思うなよ…千年公^{とっけ}よお

ニィと着替えながらレンは笑う、まるで獲物を見つけた獣のよう
に…

第23夜〈決意〉（後書き）

レンさんどうなるんでしょう…

死ネタかハッピーエンドか迷ってるんですよ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1570z/>

THE LAST MEMORY～第0使徒風斬レン～

2012年1月12日17時55分発行